# わが国における須恵器生産の開始について

酒　井　清　治

はじめに
1　須恵器工人と集落
2　各地の初現期須恵器窯
3　初現期須恵器の系譜
4　須恵器生産の開始年代
5　渡来人と管掌者
6　朝鮮半島出土の須恵器と須恵器類似品
おわりに

**論文要旨**

わが国に須恵器が最初に伝わったのはいつ，どこからであろうか。

陶邑窯跡群を始めとする窯跡の調査は須恵器研究に多くの情報をもたらせたが，須恵器を生産した人々はどこに住んで，どのように暮らしたのか検討されることはなかった。近年の調査は陶邑周辺の集落遺跡に及び，工人集落として論議されるようになってきた。しかし，その論議は，工人集落の認定が明確でなかったため，深化することはなかった。

本稿では工人集落について現在どのような研究段階にあるのかをたどり，工人集落と呼ばれている遺跡も，須恵器生産にさまざまな形で関わっていたこと，今後，窯と集落，工房を結ぶ多様な研究が必要であることを確認した。

また，わが国の須恵器は初現期の段階には，各地で生産が開始されていたが，それぞれの特徴から大庭寺窯跡は慶尚南道東部，朝倉窯跡群は慶尚南道西部，陶邑窯跡群は慶尚南道西部から全羅南道にかけてと，系譜の違いが明らかとなった。その工人は，朝鮮半島における戦いを含めた交流によってわが国に渡来し，各地域首長層のもとで始まった多元的開始であったといえよう。しかし，中央政権に近接していた陶邑では，生産が開始されてからすぐに，全羅南道を中心とした地域からの工人が渡来し，わが国の須恵器が完成し，中央政権によって製品と技術が全国に伝わったようである。わが国と全羅南道との交流は，朝鮮半島で出土する須恵器と，朝鮮半島で作られた須恵器に酷似した須恵器類似品からも窺える。

須恵器が最初に作られ始めた時期は，大庭寺窯跡の製品に見られる新羅的要素から朝鮮半島の釜山周辺に新羅が侵攻し，その地域の土器が新羅の影響を受け始めた時期の420年から430年頃であろう。

## はじめに

わが国で須恵器生産はいつ，どこで始まったのであろうか。

その生産はだれが，どこから伝えたのであろうか。

工人はどこに住んで，須恵器作りを行ったのであろうか。

この問題はすでに先学により論議されてきた問題であり，すでにその答は，4世紀末から5世紀前半にかけて，九州や畿内などを中心に各地で，朝鮮半島（以下半島と使う場合もある）の伽耶地域から，渡来人が技術を伝えたものであるという結論が出されている。

しかし，大庭寺窯跡の発見や朝鮮半島の調査の進展は，これらの問題をさらに詳細に検討することが可能な資料をもたらした。

ここでは，工人集落と窯に焦点を絞り，わが国における須恵器生産開始時の須恵器を初現期須恵器としてあつかい，工人の系譜や生産開始年代および，須恵器生産導入時の朝鮮半島との交流について探ろうとするものである。

## 1　須恵器工人と集落

### （1）　工人集落とは

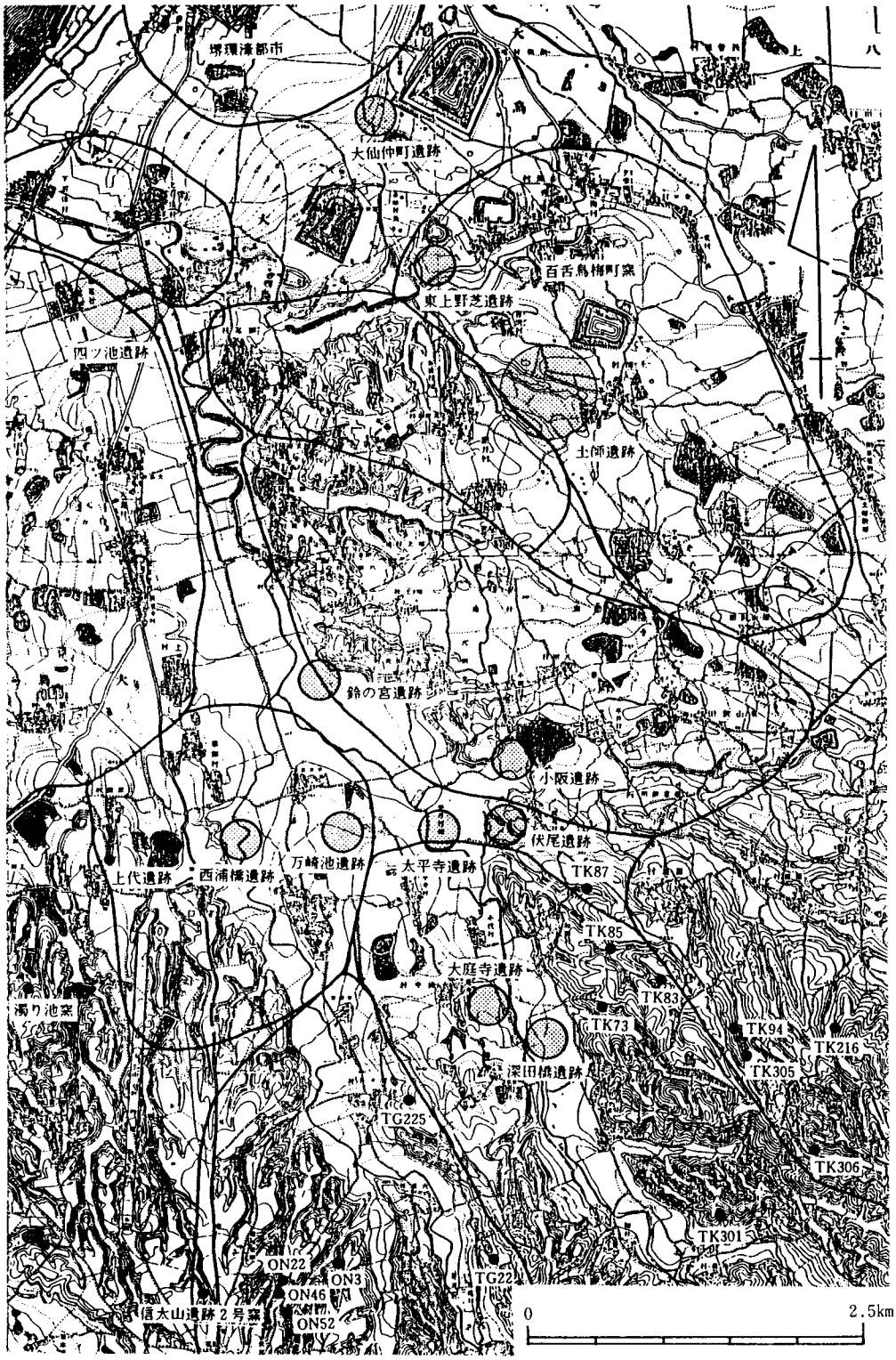
現在まで論議されている工人集落は，土器を製作する工房を含む可能性はあるものの，決して工房そのものではなく，現在まで初期須恵器の工房については不明確であるのが現状である。このような現状を踏まえた上で，現在，初期須恵器の工人集落といわれる陶邑周辺の遺跡を取り上げ，現段階の研究状況を概観してみよう。

陶邑窯跡群は窯の調査が主体であり，須恵器生産に関わる集落は不明確であった。しかし，1972年に至りTK73号窯の近くで深田橋（陶邑深田）遺跡が調査され，須恵器の集積場で，河川を使い積み出した遺跡と報告された[(1)]。集落跡も石津川流域で近接した万崎池，伏尾，大平寺，小阪，大庭寺や下流の四ツ池遺跡などが調査され，初期須恵器工人集落として論じられるようになってきた（第1図）。

これらは須恵器の出土から見ると時期的な変遷があり，万崎池が陶邑編年Ⅰ型式1段階で廃絶し，大庭寺，四ツ池からはⅠ型式1段階からの製品が，わずかに遅れて小阪，伏尾に入り，Ⅰ型式2段階からは大平寺が続くようである。

はたして工人集落は他の集落との違いを見い出しうるのであろうか。また，渡来人が須恵器生産開始時，どのように関わったのか集落を通して探ってみたい。

まず，TK73号窯から約6㎞下った四ツ池遺跡[(2)]は樋口吉文氏によれば，陶邑の最古型式を出土し，陶邑の中核部分に密接した集団を含む第Ⅰ集落圏と，百済・伽耶地域の色合いが濃く，規格




第１図　陶邑周辺の遺跡（「大庭寺遺跡（その５」）より引用）

化されないものや土師器を模倣した須恵器を出土する第Ⅲ集落圏があり，後者は「内部に朝鮮半島からの渡来工人を既存の集落に受け入れ，同化させ，『陶邑』の経営に表徴される中央政権に直結しない，また，制約を受けない集団を想定」され，付近に窯の存在を推定した。そして海岸に近い第Ⅲ集落に渡来し，この地域で同化したのち，上流のTK73号窯や大庭寺遺跡一帯に「陶邑」を形成していったと考えられ，陶邑の前段階がここにあることを想定された。

小阪遺跡について三宮昌弘氏は，粘土塊や当て具，焼け歪みや融着の見られる須恵器から須恵器生産者の集落と考えた。また，小阪遺跡を含め初期須恵器製作集団を検討され，「1. 陶邑地域における初期須恵器製作集団は，朝鮮半島系の陶質土器製作者と，在地の土師器製作者の混成集団である。2. その陶質土器製作者は日本列島地域の何処かである程度の生産を経てきた可能性が強い。3. 初期須恵器生産に関しては支配者層からの器形・器種に対する規制が働いたと考えられる。（4・5略）6. 初期須恵器製作集団は窯毎もしくは集落毎に異なった傾向の製品を作り出し，またその生産を支える集団，例えば日常の土器を供給する集団も異なっていた可能性がある。」[3]とまとめられた。

大庭寺遺跡を調査された土井和幸・冨加見泰彦両氏は，出土する須恵器が半島の陶質土器に近く，日常雑器は軟質土器が大半を占めることから，TK73号窯よりも遡るとした。また，深田遺跡と共通点が多いことから須恵器生産に深く関与した遺跡と考え，焼成不良，焼けひずみ，窯体片が見られることから，周辺に窯跡の存在を想定された[4]。予想通り1991年窯が検出された。

岸本道昭・近藤康司両氏は伏尾遺跡について小阪遺跡に近接しているものの，小阪遺跡が竪穴住居跡を伴い，須恵器生産用具の出土が見られるのに対して，伏尾遺跡では掘立柱建物が主流で，須恵器生産用具が見られないことから，須恵器工人に関わる集落でありながら，機能分担もしくは，集団の性格差が示されている可能性があるという。また，伏尾遺跡では谷を挟み墓域があり，4基の方墳が確認され規模の割りには多くの須恵器を持つことからも，須恵器生産に関与した集団の長の墓と考えられている[5]。

岡戸哲紀氏は，「工人集団の集落だけではなく，万崎池遺跡のように間接（補助）的に須恵器生産に関与した集落も予想される他，陶邑と同水系の石津川の下流域には，流通面で陶邑に関与した可能性のある四ツ池遺跡も立地する。」と，陶邑周辺の集落の性格の違いについて述べられた[6]。

陶邑で現在確認されている初期須恵器生産に関する遺跡は，窯跡が高位段丘，集落は四ツ池遺跡を除いて中位段丘，須恵器集積場と考えられる深田橋遺跡が沖積段丘に位置しており，窯と集落が分離して構築されている様相を窺うことができるものの，たとえばTK73号窯を直接操業した工人集落を特定することは現段階では不可能であり，既発見の集落と窯跡の有機的な関係を論ずるには慎重を期すべきであろう。岡田氏の述べるように，各集落により性格の違いが認められるとするならば，数世紀に亘る陶邑の膨大な須恵器生産に直接携わった工人たちの集落に見合うだけの集落が，既発見の集落にどれだけ認めうるであろうか問題となってこよう。

工人集落研究の現在の研究方向は，竪穴住居跡と掘立柱建物跡など遺構の形態と，製作道具や

焼け歪み，融着のある須恵器あるいは大甕，軟質土器などの出土量，鉄の生産など遺物の在り方から工人集落を検討しているのが現状である。工人集落の認定だけではなく，工人集落の性格まで及ぼうとしているが，この工人集落には工人だけではなく，生産を支える薪の採集，粘土の掘削，あるいは農作業に従事する人々も居住した，須恵器生産関与集団の可能性もあり，工人のみで構成された工人集落であったのかも含め，なにをもって工人集落とするか問題であろう。

### （2） 工人集落と出土土器

まず，既報告の工人集落の在り方を土器の面から見てみよう。初期須恵器の出土状況は，摂津が圧倒的に土師器が多いのに対して，和泉北部では生産跡に近いためであろう，東上野芝遺跡が75％，土師遺跡が70％以上，深田橋遺跡が85％，辻之遺跡が97％，大園遺跡が80％，太平寺遺跡が80％と須恵器が80％前後出土する遺跡が多い。[7] しかし，小阪遺跡では須恵器が土師器をやや下回る。また，四ツ池遺跡第Ⅲ集落では須恵器が39％，5世紀後半に限って見ても54％と，周辺の他の遺跡に比べ少ないことが指摘されている。[8] 工人集落と推定されている遺跡は，必ずしも須恵器の出土率が高いとはいえないようである。

石神怡氏は，坏と甕が器種全体に占める割合が深田遺跡で43.8％と37.5％であるのに対して，太平寺遺跡では65％と4％と甕の割合がきわめて低いとし，両者の間には集団間の格差があるとした。大甕の所有量がステータスシンボルであると考え，太平寺遺跡を他の出土遺物から，鉄や須恵器の生産集団の集落，深田遺跡をその長とした。[9]

小阪遺跡の在り方について，三宮氏は須恵器の集落への供給が一般的になるのは定型化以降であるため，TK 216型式並行期の小阪遺跡では少ないとした。[10] 四ツ池遺跡について樋口氏は「その使用する須恵器において，韓国伽耶地域の色彩を色濃く内包する，全く制約を加えられないものを有する集団として把握される」[11]ことが須恵器出土率に反映しているとした。これに対してTK 73号窯を遡るといわれる大庭寺遺跡では，「日常雑器は土師器がほとんどなく，軟質土器が大半を占める」[12]といわれ，初現期の須恵器を出土する遺跡でも様相を異にするようである。このような須恵器生産開始時の須恵器の出土比率は，何に起因するのであろうか。

生産開始時は陶邑では丘陵先端周辺のごく限られた地域で散在して窯が築かれ，三宮氏の述べるように，集落へ入る須恵器は数少なかったのであろう。四ツ池遺跡は窯の存在が想定されているものの，第Ⅰ集落は沖積段丘に，第Ⅲ集落も大半が沖積段丘で一部低位段丘にかかることから，遺跡内に窯が構築できたのか疑問である。仮に存在するとしてもやや南下した中位段丘上であろう。四ツ池遺跡に須恵器が少ないのは，窯からの距離があるためであろう。これに対して大庭寺遺跡は，集落内に窯が存在し，集落の規模も大きいことが須恵器の量の差として表れたのであろう。また，器種の差については深田橋遺跡のように，特に初期須恵器を多く出土する遺跡では，窯跡での甕の生産量の実体を反映しているものと考えられ，集積場であるとの認識に立てば，大甕の量差だけでは必ずしも生産集団と支配集団の違いは明確ではない。しかし，深田橋遺跡が集

積場とするならば，そこには支配者層の直接的な関与が及んでいたといえよう。

このように定型化した段階では生産量も多く，工人集落をそれ以外の集落と須恵器の量だけから判別するのは困難であろう。しかし，初現期須恵器生産開始時の工人集落では，生産量の少なさから工人集落からは余剰物として外へ出ることは少なく，同時期の集落内の須恵器の量的な差から工人集落の特定も可能であろう。

### （3） 工人集落と朝鮮半島系土器

次に工人集落における朝鮮半島系軟質土器（以下半島系土器とする）について検討してみる。半島系土器は，渡来人の生活用に製作されたようで，その分布は渡来人の居住地域を示す可能性が高いようである。

まず，半島系軟質土器にはいくつかの問題がありそれについて触れてみる。一つは朝鮮半島の系譜をひく軟質土器の名称についてである。半島の土器の祖形となる中国の漢代の土器を「漢式土器」と呼んでいたが，地域を朝鮮半島に限定して「漢式系土器」[13]の名称が生まれ，地域名称を変更して「韓式系土器」[14]が生まれてきた。しかし，この地域的名称が変更になった時期には朝鮮半島では考古学成果の公表は主に韓国においてなされており，そこに類例が見い出せたために「韓」の名称が使われたのではなかろうか。その点は，田中清美氏がまとめられたように，韓式系土器は「朝鮮半島南部地域に分布する三国時代の赤褐色または茶褐色を呈し，酸化焔焼成された軟質土器の影響を受けて在地で製作された」[15]と述べるように，現段階でも韓国を意識しているようである。

これに対して今津啓子氏は「朝鮮系軟質土器」の名称を与えた[16]。朝鮮系とした理由は，北朝鮮の当該時期の土器の内容が分からない現在，半島の南半部をさす「韓」の字は適当でなく，三国時代の前代に三韓時代を認めるならば「韓」の字は時期をも限定してしまうおそれがあるとして名付けられた。筆者もこの点では首肯できる。

もう一つの問題は，田中氏は韓式系土器を酸化炎焼成のものに限定しているのに対して，植野氏は，「本来はこれ（軟質土器）に限ることなく瓦質・陶質土器を含めた名称として使用されるべきもの」[17]と軟質土器に限定していない。後には田中氏も植野氏の考え方に同調され，軟質土器を「韓式系軟質土器」として使用している[18]。しかし，実際は軟質のものを韓式系土器，半島からの舶載されたものは陶質土器として使用している場合が一般的であり，性質の違うものについて使用する場合は「韓式系陶質土器」，「韓式系軟質土器」とすべきで，陶質土器が一般的に用いられている現在，韓式系土器も軟質土器に限って使用すべきであり，筆者はこれを（朝鮮）半島系土器と呼んでいる[19]。

さて，この韓式系土器すなわち半島系土器は各地で出土するようになり，特に北九州，大阪に集中し，渡来人と直接関わる土器として注目されている。田中清美氏によれば，大阪府下の半島系土器は89か所から出土し，旧国単位では摂津11か所，河内57か所，和泉21か所と河内が最も多

く，河内湖の縁辺部の沖積低地および生駒西麓下の扇状地上に多いという。[20] 和泉については陶邑窯跡群の西に多く分布している。

和泉で初期須恵器の工人集落と考えられているうち，半島系土器の出土は万崎池遺跡で1点，太平寺遺跡でも1点である。お互い近接している伏尾遺跡と小阪遺跡（その3調査区）では，前者がⅠ・Ⅱ区の集落を合わせて3.9%，[21] 後者が須恵器と土師器の量がほぼ同数のうち，土師器の20%にあたるといい，[22] 近接するにもかかわらず出土量に差があることは，これは集落の機能分担もしくは，集団の性格差が示されている可能性がある。大庭寺遺跡では，日常雑器は土師器がほとんどなく，軟質土器が大半を占めるという。このような半島系土器の出土量の違いを石津川流域だけで見るならば，大庭寺遺跡の在り方は他の集落よりも丘陵に近づくこと，初現期の窯を伴い，初期須恵器がより朝鮮半島の陶質土器に類似し，その生産に渡来人が関与していた可能性が高いことがその理由であろう。大庭寺遺跡，小阪遺跡を除けば他の工人集落と考えられている遺跡からは半島系土器の出土量は少なく，和泉の中でも大園遺跡などのほうが多く，さらには河内のほうが多い。田中氏によれば河内に多いのは新来の土木技術をもち沖積低地の開発を行った渡来人の居住の結果であるという。当然和泉の陶邑の須恵器生産も新来の技術であり，その出土量の多さは渡来人の存在を示すはずである。しかし，Ⅰ型式2段階から始まり，Ⅰ型式3段階以降が主体の太平寺遺跡では半島系土器が1点だけであることは，渡来人がいないという見方もあろうが，半島系土器が急激に消滅することと，須恵器が定型化することと関連があろう。

これに対して小阪遺跡では，土師器だけでなく韓式系土器も多く使われている。三宮氏は共伴する韓式系土器を「須恵器的土師器」として窯焼成の可能性があり，焼きのよい，黒斑を伴わない黄橙色から黄灰色系と，野焼きでも焼成可能な軟質の2類があり，前者は集落内の須恵器と器形的な共通点はなく，他集団の製作による搬入品，後者を集落内で生産したと考えている。[23] 前者がどのような窯で焼成されたか問題であろうが，三宮氏の述べるように，須恵器とは根本的に器形の違いがあり，轆轤を使ったと考えられる高坏についても無蓋高坏，それも口縁部が大きく開く形態が主体で，違いが歴然としており，須恵器工人と別の集団を考えるべきであろう。

大庭寺窯跡では灰原から甑・長胴甕・平底鉢などの軟質土器が出土しており，ここで焼成された可能性が指摘されている。[24] また，TK 73・85号窯でも軟質系の深鉢形土器，甑，甕形土器が出土している。このような出土状況をどのように解釈したらよいのであろうか。

現在，窯から半島系土器が出土するのは，初現期の窯に限られている。また，集落でも須恵器出現期の集落の方が半島系土器の出土率が高いといえよう。おそらく，窯から半島系土器が出土することは，須恵器生産にたずさわった渡来人との関わりが想定できよう。従来から初現期の須恵器生産は土師器の工人が参画していると考えられており，その証左として出土須恵器の中に土師器の器形が含まれていることが指摘されている。[25] 同様に須恵器生産に渡来人が関与していたことから，TK 73・85号窯から出土する須恵質の半島系土器は，土師器の場合と同様初現期の須恵器に取り入れられた器形と考えられる。このことは後述するように，和泉の軟質土器は，叩きが

不明確でナデが多くみられる特徴があり，これはこの地域の渡来人が須恵器生産に関与していたことと関連があろう。

一方大庭寺窯跡出土の半島系土器は軟質土器が多く，大庭寺遺跡の住居跡でも同様で，各地の集落出土の半島系土器にも，須恵質の製品がほとんどないことから，基本的には半島系土器の内でも軟質土器については，登窯で焼成していなかったと考えられる。[26]

登窯を使用しない軟質土器について，これらは出土状況からみるに，各集落内での自給自足をとらず，小地域に供給する生産体制がつくられたと考えられる。しかし，渡来人の血縁的な同化だけでなく，同一集落における混在した居住形態をなし，日常什器は土師器を用い始めることが短期間に進行し，半島系土器の技術，器形も土師器あるいは須恵器と同化し，独自の生産体制を長く保持することはなかったようである。

### （4）　工人集落と工房

須恵器の生産機構（体制）は窯を中心に，隣接して工房，粘土採掘場，あるいはその周囲に広がる薪の採集地などがその活動の範囲といえようが，陶邑でいえば高位段丘あるいは丘陵であろう。問題は工房と集落の関わりである。須恵器生産開始段階では窯も丘陵の先端部に位置した中位段丘近くにあり，窯の周辺に集落はつくられたと推定される。すなわち大庭寺遺跡のように窯と集落が併設する在り方が好例であろう。やや時期の下った野々井遺跡，山田遺跡，上代遺跡等のように高位段丘に位置する遺跡もつくられている。これらも窯に近接し，窯跡近接集落といえるものの，工房は確認されていない。大庭寺遺跡においては6軒の竪穴住居跡と集落の区画溝があるものの，ロクロピットなど検出されていない。[27] 仮にここが工房とした場合，窯まで至るためには狭いが深い谷を渡る必要があり，台地の下を迂回する方法もあるものの，竪穴住居跡から窯まで約200mもあり，素地のままの半製品を運ぶには遠距離過ぎよう。特に大庭寺窯跡では大甕が多いことからも，窯に近接して工房が併設されていたと想定できよう。民俗例であるが，丹波立杭窯や常滑では共同窯の多くは作業場が各自の住居に接し，乾燥後各自かごなどでかついで運んだようである。[28] しかし，陶邑の場合，窯が多いことを考えると，操業に関与した人数も多く，はたして窯に近接したところにそれだけの居住面積があったものか疑問である。中村浩氏の述べるように，[29] 丘陵域には集落は形成されなかったのであろう。おそらく，大庭寺遺跡のように初現期には窯が低い位置に立地することから，窯と工房が集落内か隣接した立地形態をとるが，窯が丘陵深く立地することと，窯の増加による集落規模の拡大から，集落と窯が離れる立地形態に変遷したと想定できる。陶邑窯跡群のように規模の拡大した窯では，初期の段階で組織的分業が整えられ，基本的に集落＝窯＋工房であったが，後には集落と窯＋工房は離れた立地形態がとられ，時には複数の窯を操業する場合もあり発展していったのであろう。しかし，陶邑では一つの工房で1基の窯の製品を製作した「単工房単窯型」か，一つの工房で複数の窯の製品を製作した「単工房複窯型」なのか，現在となっては明確にすることができない。

### （5） 工人集落の構造と問題点

中村浩氏は，陶邑周辺の遺跡について(1)住居，集落の遺跡，(2)流通の遺跡，(3)埋葬・祭祀の遺跡に分類をしたが，須恵器生産に直接従事した人々と，農業生産にあたる人々がいて，各々集落を形成していたとし，彼らはお互いに相互補完の関係にあったとする。[30] このように陶邑が須恵器生産者のみで構成されたものではないとした。

陶邑周辺の集落の在り方について検討した岡戸哲紀氏は，初期の段階では軟質土器の出土から，渡来系工人が関与していたが，その出土量，土師器との割合，須恵器の形態などは各時期・各遺跡によって異なり，渡来系工人の関与の諸状況も異なっていたとする。また生産規模が拡大していく状況の中で，工人組織の諸様相も集落によって差があり，集落出現の契機やその後の発展過程も異なり，この様相が集落の立地・構造・規模の違いとして反映されているとした。[31]

石神怡氏は，深田遺跡の長を須恵器生産集団を直接掌握する首長層とし，太平寺遺跡などの小単位の生産集落を把握し，ヤマト王権から地域首長に要求して貢納物の生産が行われた。貢納物としての須恵器は，ヤマト王権から各地域首長への下賜が行われ，在地首長も首長的私有として，在地内の諸首長に分配した。そして，ヤマト王権への全面的隷属関係として在地首長があったのではなく，在地首長の余剰品に対する私有化，それにもとづく商品的交換がかなり日常的に行われたと想定している。[32] 筆者も基本的にこの支配構造には賛成するが，貢納物としての須恵器の動きについては疑問がある。石神氏は須恵器生産集団への須恵器の移入について，工人集落出土土器が同一手法，同一器種でないことから，自らの生産物も配分品として手にいれたものとしている。しかし，ある程度分業化された体制の中で貢納品以外は在地首長層に管理されていたようで，さらにその下の管理者クラスでもある程度の裁量や隠匿も行われていたと考えられる，もっとルーズな生産品の管理が行われていたのではなかろうか。すなわち和泉北部の集落出土の須恵器の夥多に対して，摂津など周辺地域では土師器が圧している。ところが一方では，北は北海道から南は九州，あるいは海を越え朝鮮半島まで及ぶ分布圏が形成されていることは，中央政権と直接窯を掌握した首長層の重層的な生産管理機構があったからだと考えられる。

今後，集落個々の性格についての論議が必要であるが，前述した須恵器や半島系軟質土器などの分析や，いまだ確認できていない粘土採掘場や工房の発見により，工人集落の認定およびその性格，工人集落―工房―窯の有機的な関連や工人集落同士の横のつながり，さらにはその生産機構，支配構造など，窯跡の調査例と比較してほとんど検討されていない分野といえようが，陶邑を例に上げるならば工房の確認できる残された場所は少なく，すでに発掘された窯と集落とどのように関連づけるのか，今後の課題であろう。

## 2　各地の初現期須恵器窯

須恵器生産の初現は，陶邑TK73・85号窯[33]，一須賀2号窯[34]，濁り池窯[35]，吹田32号窯[36]，大庭寺窯[37]，三谷三郎池西岸窯[38]，山隈窯[39]などの発掘により次第に明らかにされてきた。しかし，その初現の窯の特定についてはいくつかの考え方が提示されている。一須賀2号窯とする田辺昭三氏，TK73・85号窯と一須賀2号窯，吹田32号窯がいずれも異なる系譜を持つとする中村浩氏，吹田32号窯→一須賀2号窯→陶邑窯とする藤原学氏，九州の甘木市周辺の朝倉窯跡群が陶邑を遡るとする橋口達也氏などが代表としてあげられた。しかし，最近大庭寺窯跡が発掘され，畿内の窯のいずれの窯よりも遡ることが明らかになり，初現期の須恵器の再検討が必要になってきた。

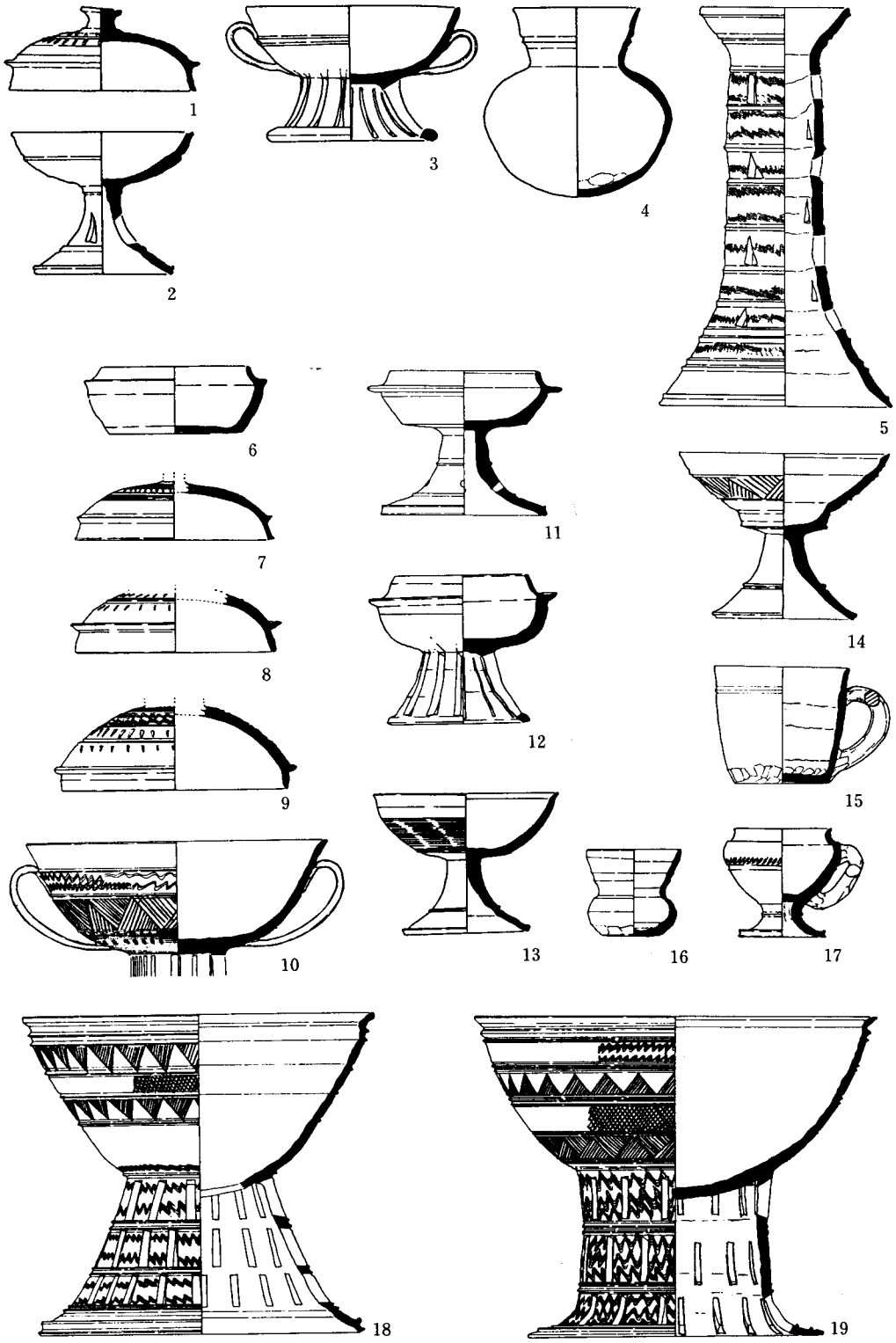
### （1）　陶邑窯と一須賀2号窯，大庭寺窯

田辺氏は，大阪府河南町一須賀2号窯と大阪府堺市TK73号窯を「高蔵（TK）73号窯型式」として新古の関係でとらえた。古段階の特徴について，「甕体部の格子叩目文と壺，器台などにみられる篦描文の両者を，常用すること」とし，一須賀2号窯をあて，新段階の特徴を「篦描文，格子叩目文はほとんど認められ」ず，「後出型式に一般化する櫛描文と平行叩目文とが主体を占めている」としてTK73号窯をあげた[40]。これに対して，中村氏は，一須賀2号窯の器台や甕に見られるコンパス文が，退化した雑なものになること，考古地磁気法年代測定法の成果で一須賀2号窯が最古ではないという結果などから，各窯跡がいずれも異なる系譜を持つ生産と考え，その前後関係については一須賀2号窯は，陶邑窯跡を先行することはないとした[41]。ここで注意すべきは格子叩き目文と櫛描文，考古地磁気年代測定法である。

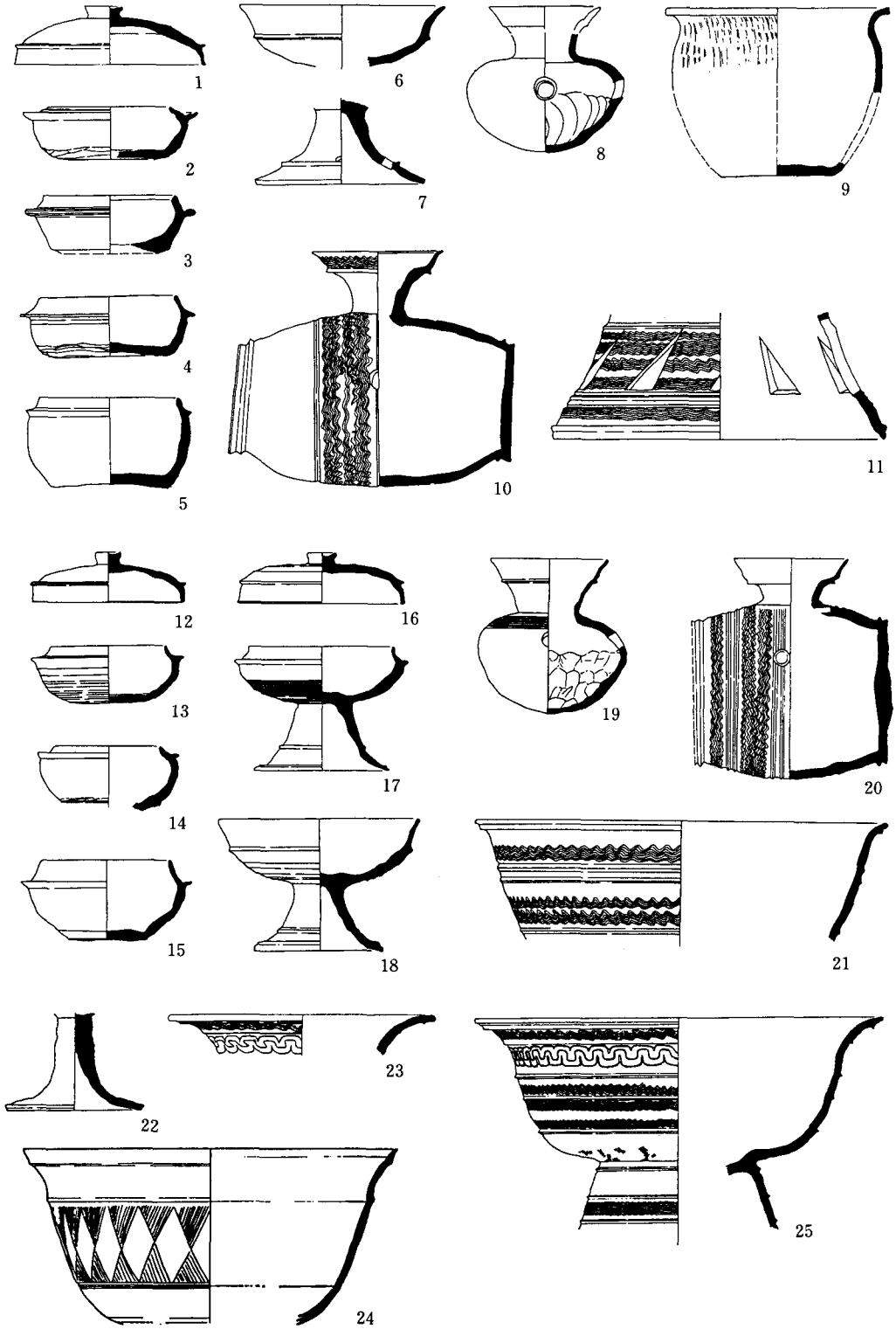
中村氏は陶邑TK85・87・73号窯の叩き目文の統計をとり，それぞれの窯毎に斜格子叩きが4.6・2.9・0％，格子叩きが3.7・1.8・0.2％，縄蓆文叩きが0.3・0.03・0％とTK85号窯から順次少なくなり，TK73号窯にはほとんど存在しないこと，また逆に平行叩きについては，91.4・95.5・99.8％とTK73号窯が多くなることを指摘している。後出の叩きは平行叩きが主流で，格子，斜格子がないことから，TK85号窯が先行すると推定している[42]。この結果からすれば，一須賀2号窯は格子叩き目文が特徴ということであり，TK87号窯より先行することになろう。ところが，中村氏の依拠するところの考古地磁気法年代測定法では，一須賀2号窯はTK87号窯よりも新しいという結果が出て，中村氏もその成果を支持しており，格子叩きから見た前後関係とは矛盾することになる。

田辺氏も格子叩きが一須賀2号窯の製品に典型的な傾向とし，TK73号窯の製品にはほとんど認められないとして，前後関係を考える一つの材料としているのである。

また，田辺氏は，TK73号窯型式の新段階の特徴の一つに櫛描文が主体を占めるとするが，田辺氏が旧稿で「一須賀2号窯の製品中，鉢，壺，甕の一部に文様が認められる。篦描文と櫛描文




**第2図**　初現期須恵器窯出土須恵器(1)（縮尺1/5，5・18・19，1/7.5）
1～5，堺市大庭寺TG232号窯　6～19，同393—OL土器溜り



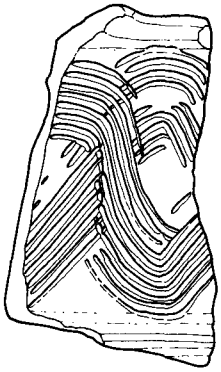

**第3図**　初現期須恵器窯出土須恵器(2)　(縮尺1/5，23・24，1/7.5)
1～11，堺市陶邑TK73号窯　12～21，同TK85号窯　22～25，南河内郡河南町一須賀2号窯

である。櫛描文はすべて波状文で，以後の須恵器にながく継承されていく。[43]」と述べるように，古段階の一須賀２号窯にも多く見られ，田辺氏のいう櫛描文の出現，盛行による段階設定が明確とはいえない。

このように田辺氏，中村氏の前後関係の検討に使われている格子叩き，櫛描文には，問題も多いことが指摘できる。筆者は，形態の比較からTK 87号窯の坏について，TK 73・85号窯よりも新しく，TK 216号窯の形態により近いと考えている。陶邑TK 216号窯型式以降の型式変遷と比較して，TK 87号窯とTK 73・85号窯との間には時間差を認めることができる。次にTK 73号窯とTK 85号窯については，TK 73号窯の方が坏身の蓋受け部が横に長く張り出しており（第３図２～４），この形態をTK 216号窯に結ぶことは無理があり，また，TK 73号窯の坏の11点中いずれもが手持ち箆削りであるのに対して，TK 85号窯では５点中１点だけであること，TK 85号窯の中に次型式に連なる形態の坏（第３図13）が存在すること，さらに，高坏はTK 73号窯の方が基部が細く，高坏の変遷からすればややTK 73号窯の方が古いと考えられる。甕についても，TK 73号窯の口縁のプロポーションは緩やかに外反し，口唇端部が丸く作り出されているのに対して，TK 85号窯では口縁上位でさらに強く外反し，口唇部内面が窪み，口唇端部が矩形になり，また，口唇部下の稜が口唇端部から離れる傾向にある。このようなTK 85号窯の特色はさらに新しいTK 305号窯に連なる特色であることからも，TK 73号窯→TK 85号窯の関係にあると判断できるが，その時間差はわずかであろう。

では，同じ陶邑の中で検出された堺市大庭寺窯跡出土品[44]（第２図）を見てみよう。大庭寺窯跡では高坏蓋の列点文，櫛歯文，器台の鋸歯文，格子文，組紐文，集線文や，高坏の多窓や三角透し，菱形，二段透し，および鉢部が深く，脚部が太く裾部が大きく開く器台は，現在まで陶邑では検出されていない。また，甕の底部中央の製作時の絞り目も，近畿地方では和歌山県鳴滝遺跡で出土しているものの，陶邑窯では未発見であったが，大庭寺遺跡で出土したことにより陶邑の中でもTK 73号窯と異なる技法，形態を持つ製品が大庭寺遺跡で生産されていたのである。

次に，陶邑各窯と一須賀２号窯とを比較してみよう。一須賀２号窯の特徴として，器台・甕のコンパス文（第３図23・25），器台の箆描き鋸歯文（第３図24），組紐文（第４図）があげられる。最近大庭寺窯跡から器台の箆描き鋸歯文や格子目文，あるいは組紐文が出土し，陶邑の中でも狐池南遺跡の窯跡でも組紐文が使用されていることから，この文様の時期が問題であろう。大庭寺窯跡例は整っているのに対して，一須賀２号窯例は雑で，格子目文も大きい。特に組紐文を比較すると，大庭寺窯跡では稚拙であるものの，半島例と同様に横にしたＳ字を組み合わせて連ねているのに対して，一須賀２号窯（第４図）と狐池南遺跡の窯跡では，一度波状文を描いた後，もう一度うまく交差するように波状文を重ねて擬組紐文としており，TK 208号窯の器台にも見られる新しい様相といえよう。さらに一須賀２号窯では陶邑に見られないコンパス文も，ヘラで描いたため弧を描かず，直線的で矩形に近くなり，間隔も乱れ，島根県長尾古墳[45]の器台のコンパス文が基点を中心に正しく円弧を描くのに対して，崩れが著しい。波状文も同様に乱雑である。こ



**第4図**　一須賀2号窯器台脚部擬組紐文

の点を取り上げるならば，一須賀2号窯は大庭寺窯跡よりも後出といえよう。一須賀2号窯の器台は体部が深く，腰を持ち，基部もやや太く，大阪府大東市堂山古墳の器台に近い形態になろう。TK73号窯の器台は，いずれも脚裾部が開かず直線的（第3図11）で次型式に見られる傾向である。器台の変遷が，深い体部，太い基部，開く脚裾部から，新しくなるほど体部が浅く，基部が細くなり，口唇部の外反が少なくなるとともに，脚裾部が直線的になる。一須賀2号窯の器台は，口唇部の外反を見ると，脚裾部が広がる可能性があり，TK73号窯をわずかに遡る可能性が高い。

大庭寺窯跡と陶邑TK73号窯については，両遺跡の中間に位置する陶邑の集積場と考えられる深田橋遺跡から，大庭寺窯跡の製品が出土しないこと，大庭寺遺跡東端の56—OR河川跡から出土した初期須恵器はTK73号窯並行と考えられ，共伴する櫛歯文を施す蓋は大庭寺窯跡の中でも新しい段階の製品であることからも，時期差が考えられる。

このように陶邑の変遷は，形態，文様から見るならば，大庭寺窯跡→TK73・TK85→(　)→TK87→TK216が，また，地域を越えて大庭寺窯跡→一須賀2→TK73の変遷も考えられる。このような変遷を考えたとき，中村氏の格子叩き，縄蓆文叩きの量差から導き出された序列，TK85→TK87→TK73，あるいは陶邑窯→一須賀2号窯と矛盾することになる。田辺氏は格子叩きの量差と前後関係は関連があると考え，一須賀2→TK73の変遷を想定する。陶邑では地域を違えて，I型式1～2段階のTG22号窯には格子叩きは見られないのに対して[46]，I型式1段階のON22号窯では，格子叩き68%，平行叩き13%，平行で一部格子叩き19%と報告され[47]，TK（高蔵）地区より多いことから，必ずしも格子叩きの量差が新古を示すものでなかろう。工人集団や谷毎の違いを考慮すべきかもしれない。この違いは生産に携わった渡来人の在り方と関わりがあろう。すなわち半島系土器の影響も考えられる。

大阪湾沿岸の半島系土器を検討した今津啓子氏は，平行叩き50%，正格子叩き25%，斜格子叩き15%，縄蓆文叩き10%とした[48]。全国的に半島系土器の平底鉢を検討した尾谷雅彦氏は，平行51.5%，格子33.3%，縄蓆文9.1%とした[49]。また，田中清美氏は同じく平底鉢について大阪府下の集計をしたが，氏の集計から叩きを持たないナデ，ハケを除くと，平行52.3%，正格子22.7%，斜格子13.6%，縄蓆文11.4%であった[50]。これらはいずれも時期的に限定されていないため問題も多いが，いずれも平行，正格子，斜格子，縄蓆文の順序であった。中村氏の統計した初期須恵器の叩きの量差と比較すると正格子，斜格子が入れ替わり，平行叩きの割合の違いが指摘できるものの，初期須恵器の甑，平底鉢などは半島系土器の器形であり，田中氏が指摘するように和泉地域では平行4点，正格子1点，斜格子2点に対してナデは23点を数える。小阪遺跡だけの集計であるため問題もあるが，和泉地域の特徴である可能性がある。このナデを持つ半島系土器からは，須恵器生産との関わりが想定でき，さらに半島系土器の高坏に轆轤を使用した例が多いことから，

和泉の半島系土器と初期須恵器の関わりは深いと考えられる。[51]

（2） 吹田32号窯

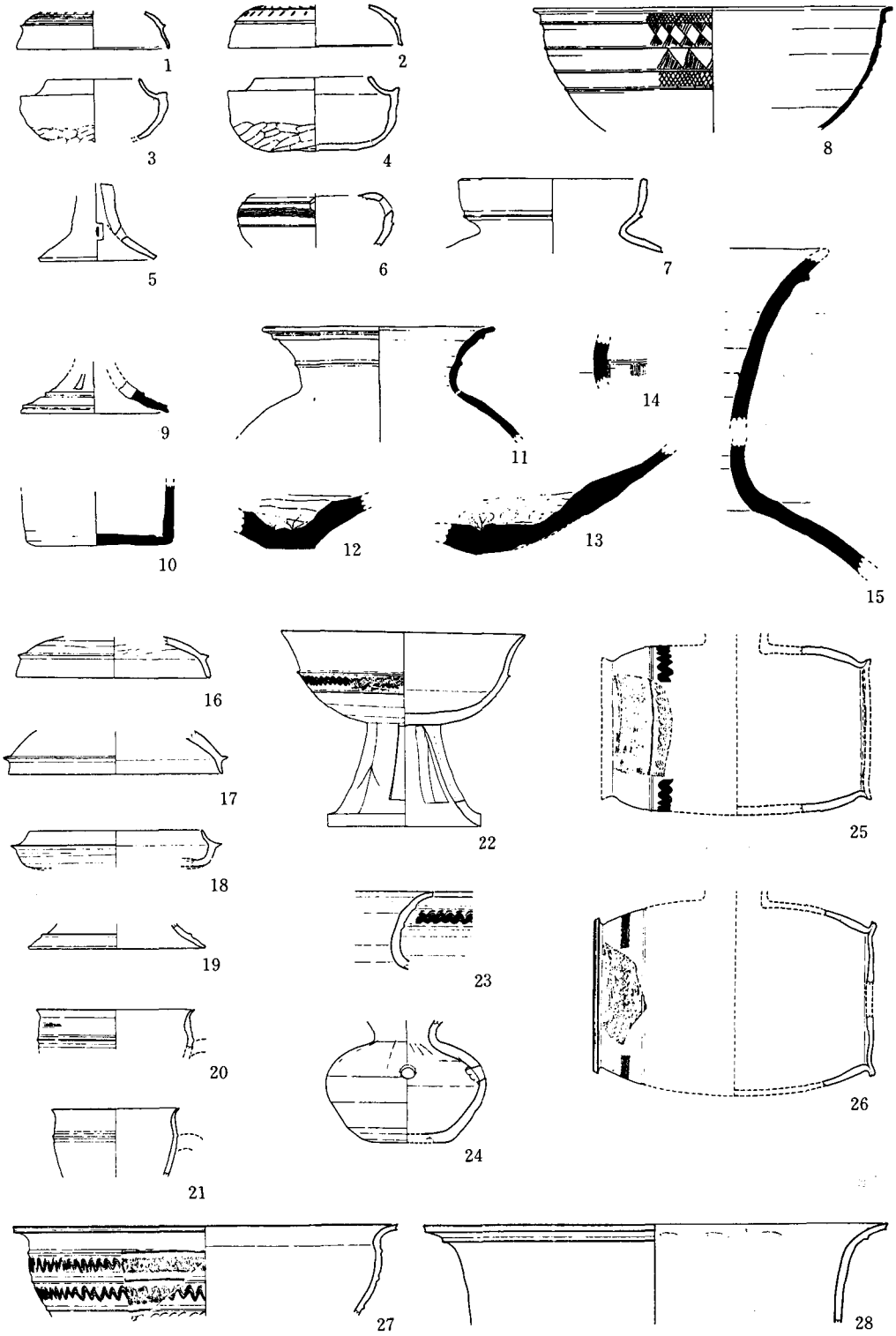
次に摂津で検出された吹田市吹田32号窯を見てみよう。調査した藤原学氏は，香川県高松市三谷三郎池西岸窯の製品に形態・調整・胎土が似ていること，窯内で検出された石礫が西摂平野で採取された可能性が強いこと，器台が香川県善通寺市南鴨遺跡例と酷似していることなど，西方からの系譜を考えた。さらに，窯体の構造が吹田32号窯では長方形であるのに対して，TK 73号窯などは形が崩れて時期が降ること，器台の斜格子文・鋸歯文が陶邑にないことなどから，吹田32号窯→一須賀２号窯→TK 73号窯の順序を想定した。[52] それに対して中村氏は「形態の相違というものが，ただちに時期の前後関係を示すものではない」[53]とした。中村氏の考え方は，広岡公夫氏の考古地磁気法による，吹田32号窯は陶邑窯跡よりも古くならないという結論にも依拠している。

吹田32号窯の製品の特徴をあげるとすれば，器台（第５図８）の鉢部が深く，半球形になり，口唇部が大きく外反すること，鋸歯文と格子文を施文することであろう。また，脚部が太くなることから，短いことが想定でき，口唇部も大きく外反することから，脚裾部も外反する可能性が高い。鋸歯文，格子文については，最近大庭寺窯跡でもこの文様を焼成していることが確認された。このような鋸歯文と格子文を伴う例には他には和歌山市楠見遺跡に鋸歯文の中を格子文にする例があるだけである。吹田32号窯例は，器台鉢部の稜線が一本で鉢部の稜が鈍いこと，甕の口唇部の稜もやはり鈍いという特徴も持ち，系譜解明の難しさが指摘できる。しかし，これらの文様の存在，施文の丁寧さ，鉢部の深さ，口唇部の外反と内側の段，脚の太さ，いずれをとっても古い要素が多いようである。初現期の須恵器の文様と器形を比較すると，鋸歯文・格子文・組紐文など古い文様ほど，鉢部が深く，脚部の太く古い器形に描かれ，生産初期の段階から共通した変遷が考えられ，地域を越えた比較もある程度可能で，藤原氏の変遷観は首肯できる。

（3） 三谷三郎池西岸窯跡

香川県高松市に所在する。出土量が約70点と少ないため全貌は不明確であるが，甕が多い点では他の初現期須恵器と同様である。その特徴は甕の口唇部が丸く，稜部も鋭くほぼ一定した位置に付き，底部に絞り目を持つ（第５図12・13）。高坏は，脚部下半の稜の上に三角状の透し（第５図９）が見られる。また，窯跡出土の製品としては唯一の集線文（第５図14）があり，亀田修一氏が述べるように朝鮮半島の伽耶地域でも東寄りと，慶州を中心とした新羅地域に見られ，[54] 系譜を考える上で注目される。

この窯の製品は大庭寺窯跡が発掘されるまで，陶邑には類例がなく，系譜を異にしていると考えられていた。しかし，口唇部の形態，底部の絞り目，高坏の三角透しは大庭寺窯跡にも見られ，同一と言えなくも近い系譜であり，時期的にも大庭寺窯跡の製品に近いと推定できる。




**第5図**　初現期須恵器窯出土須恵器(3)（縮尺1/5，8・28，1/7.5）

1～7，和泉市上代窯跡　8，吹田市吹田32号窯跡

9～15，高松市三谷三郎池西岸窯跡　16～28，朝倉郡三輪町山隈窯跡

### （4） 朝倉窯跡群

1978年，福岡県甘木市池の上墳墓群が，1981年には隣接する古寺墳墓群が発掘され，出土した土器が陶邑の須恵器と共通性を持たないことから，陶質土器の可能性が指摘された。報告した橋口達也氏は，壺の口唇部と波状文から4形態に分類し，それぞれをⅠ～Ⅳ式として設定した。そして共伴関係から陶邑Ⅰ型式第1段階は，池の上Ⅲ式とⅣ式との間とした。年代はⅠ式を4世紀末葉，Ⅱ式を5世紀初頭～前葉，Ⅲ式を5世紀前半の中頃，Ⅳ式を5世紀中頃前後に比定した。[55] その後，橋口氏は池の上Ⅲ式が陶邑Ⅰ型式1段階に，池の上Ⅳ式が陶邑Ⅰ型式2～3段階に相当するとして，年代もⅠ式を4世紀後半，Ⅱ式を4世紀末～5世紀初頭，Ⅲ式は5世紀前半の前半，Ⅳ式は5世紀前半の後半と修正した。[56]

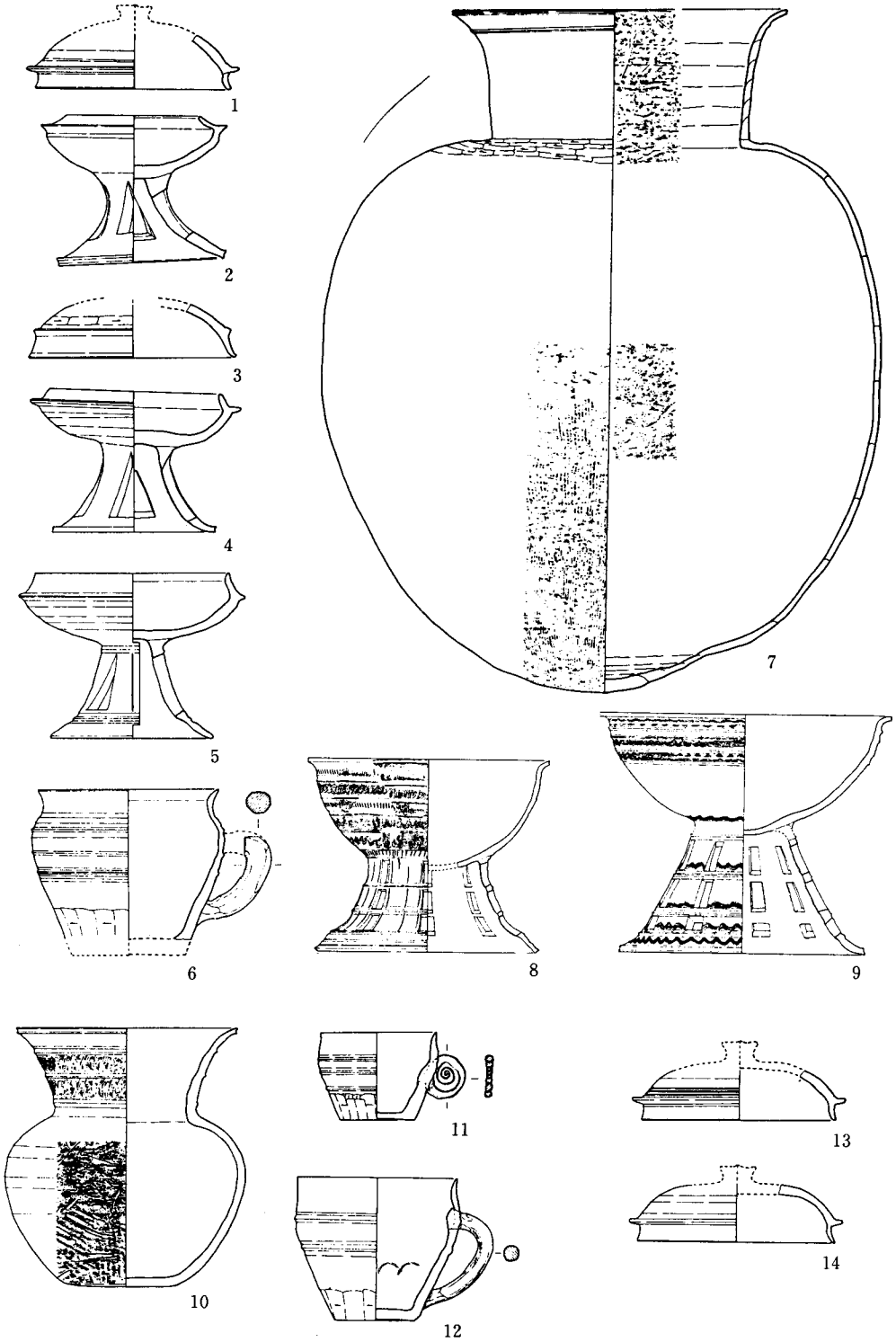
それに対して柳田康雄氏は，池の上Ⅰ～Ⅲ式は形態的・時間的にも小差で，5世紀前半に含まれるとし，池の上Ⅰ式をⅠa・Ⅰb式，Ⅲ式をⅡa式，Ⅳ式をⅢ式とした。[57] 小田富士雄氏は，各地の出土状況から橋口編年を大きくⅠ・Ⅱ式とⅢ・Ⅳ式の前後二時期に分けるのが実状に適応しているとした。そしてこれら伽耶系須恵器をⅠ—A期とし，定型化した須恵器をⅠ—B期とした。[58] その後，小田氏は池の上Ⅰ～Ⅲ式を定型化以前，Ⅳ式を定型化段階とし，前者のⅠ—A期が二分される可能性を説いた。[59]

中村勝氏も，特徴的な波状文（第5図27）をA類として，これが池の上Ⅰ～Ⅳ式のいずれにも含まれていることから，同一工人固有の文様とするならば時間的な幅はきわめて制約されるとした。[60]

このような考えを参考に，ここでは，特徴的な波状文を持つ器台と壺を取り上げその形態に注目して，変遷を追ってみたい。

特徴的な波状文は山隈窯から出土している（第5図27）ことから，朝倉窯系とするが，類似する形態が山隈窯の他，池の上6号墳（第7図9），池の上D—5・D—7付近，石人山古墳，[61] 樋渡遺跡SD—02溝，[62] 有田遺跡[63]等に出土する。これらの大きな特徴は，器台の鉢部が浅く，鉢部に突線あるいは沈線によって文様区画帯をつくるが，大きく外反する口縁には基本的に施文せず，池の上6号墳例から三段の波状文が施されたようである。しかし，有田遺跡のように三段の波状文の下にコンパス文を施す例もある。脚部は池の上6号墳，石人山古墳では，三角透しを主体とする。これらはいずれも波状文と形態から時期的には近接するものの，石人山古墳の中に，鉢部の文様区画が突線（a類）と沈線（b類）になる例が出土しており，後者が後続するであろう。また，池の上6号墳例（第7図9），樋渡SD—02，池の上D—5・D—7付近は，類例の中でも最も口唇が外反し，石人山古墳の透しが四段であるのに対して池の上6号墳では三段になることから，先行するであろう。すなわち，池の上6号墳→樋渡SD—02溝，山隈窯，池の上D—5・D—7付近，有田，石人山古墳a類→石人山古墳b類の順序であろう。

これらに続く器台として，小田茶臼塚古墳例[64]（第7図16・17）がある。小田茶臼塚古墳の器台




**第6図**　初現期須恵器(1)（縮尺1/5，7～9，1/7.5）
1～6，甘木市古寺墳墓群6号土壙墓（D—6）
10～12，同D—10　13・14，同表採

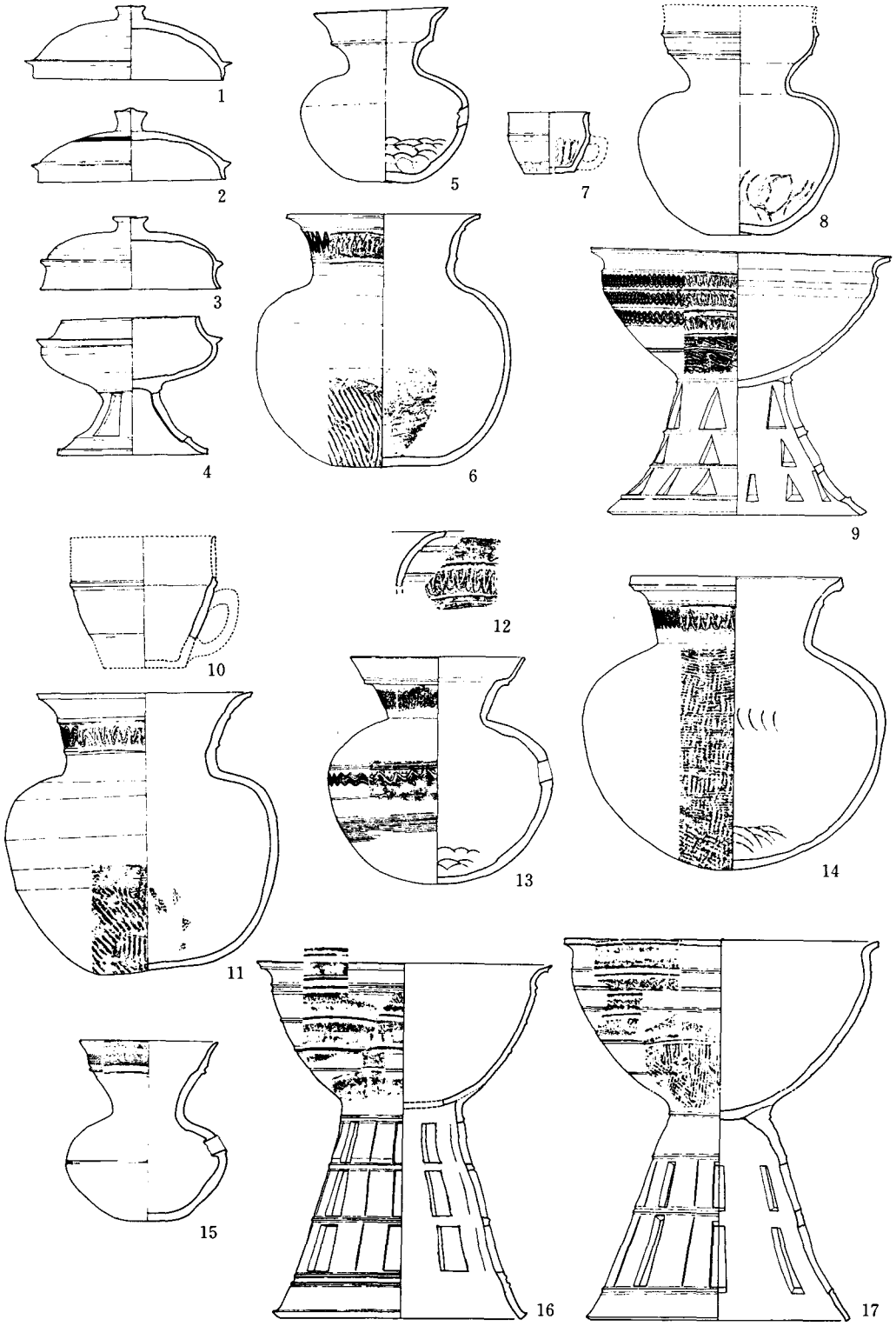
脚部のほとんどには，透しの間に縦の刻線があり，古寺D－6，石人山古墳と共通し，朝倉窯系と考えられる。小田茶臼塚古墳の器台は，口縁の形態から大きく2種に分かれる。1類は口唇部が角縁になり，鉢部がやや丸みを持ち，厚手で，柳田氏の「器台a」としたものであり（第7図17），2類は口縁がやや強く外反し，口唇部がつまみ出されたように尖るもので，これは鉢部が1類に比べ直線的に立ち上がり，器厚が薄く，柳田氏の「器台b」としたもの（第7図16）で，前者はどちらかといえば古寺D－6（第6図8）に類似し，後者は池の上6号墳，石人山古墳，山隈窯の器台（第5図27）に類似する。両者とも脚部の刻線，口唇部の形態，波状文などからも同一系譜の中でとらえられるものであろうが，柳田氏は器台a→bの前後関係を考えている。また，それに対応して共伴する甕も，口唇の形態と器台の脚端の類似することと，頸部の突線が順次下がるという変化から，甕a→bへ変遷し，甕cはすでに波状文を持つことから，後続するとした。しかし，これらは後述するように，近接する時期の可能性が高い。なお，この時期に並行する器台が，福岡市吉武遺跡SK(65)28に出土する。

やや先行する資料として古寺D－6の器台がある。2点出土するが，1例は鉢部が浅く，鉢部と脚部にも後出的な波状文を施すことから，朝倉窯系でないもの（第6図9）と，鉢部が深く，全面に特徴的な波状文と櫛歯文で6段に施文する例（第6図8）がある。いずれも方形透しであるが，後者には透しの間に縦の刻線文を入れることで，池の上6号墳，石人山古墳，小田茶臼塚古墳に連なる朝倉窯系の特徴であり，やや小型であり，口縁の外反が弱い点で気になるものの，鉢部の施文が全面に及ぶこと，鉢部が深いことから，池の上6号墳に先行すると考えられる。古寺D－6の朝倉窯系の器台の波状文は，左→右の方向で，後続する中でも古いと考えた池の上6号墳の器台，壺と同一方向であり，その他の器台が右→左であることを考えても先行するであろう。

また，古寺D－6に共伴する有蓋高坏（第6図1）は，蓋の口縁が外反し，稜部が張り出すが，類例は古寺表採資料（第6図13・14）にある。蓋の変遷を見ると古寺D－6・古寺表採→池の上6号墳（第7図3）→池の上6号墳（第7図1）・池の上5号墳となり，池の上5号墳で新しい壺（壺b類）と伴う蓋は，池の上6号墳に見られることからも，古寺D－6の方が先行するであろう。脚部は四方透し（第6図2・4）であることにも，古い様相を見ることができる。しかし，古寺D－6（第6図7）と山隈窯（第5図28）の甕を比較すると，前者は口唇下の突線が丸みを持ち鈍くなり，同類が後者の表採品の中にあり，山隈窯操業時に近接する可能性がある。

これによって再度器台の変遷を並べると，古寺D－6→池の上6号墳→樋渡SD－02，山隈窯，池の上D－5・D－7付近，有田，石人山古墳a類→石人山古墳b類→小田茶臼塚古墳と並ぶ。以下古寺D－6を器台a類，池の上6号古墳を器台b類，樋渡から石人山古墳a類までを器台c1類，石人山古墳b類を器台c2類，小田茶臼塚古墳を器台d類として述べていく。

次に壺について見てみよう。朝倉窯系の器台と共伴する例は，池の上6号墳と石人山古墳であり，両者を比較すると，先行すると考えた池の上6号墳例は口縁下半の立ち上がりは開きが少なく，口縁上半で大きく外反する。また，胴部は下半部に膨らみを持ち，平底の面が広い（第7図




**第7図**　初現期須恵器(2)（縮尺1/5，9・16・17，1/7.5）
1～9，甘木市池の上墳墓群6号墳　10・11，同D－2　12～14，同D－4
15，同D－16　16・17，甘木市小田茶臼塚古墳

6)。それに対して，石人山古墳は口縁が頸部から大きく外反し，波状文が特徴的であるものとないものがある。両古墳の比較から，池の上6号墳に類似する例は，池の上D—2号墳（第7図11)，金武小学校蔵[66]，飯盛吉武遺跡例[67]などがあり，これを壺a類とする。石人山古墳に近く，壺の胴部下半がすぼまる例は，池の上D—1，池の上D—5・D—7付近，古寺D—10（第6図10)，隈平原2号墳[68]，東尾大塚古墳[69]，宝満川川底，池の上5号墳などがあり，これを壺b類とする。

器台と壺から見た並行関係は，器台a・b類に，壺a類が，器台c1・c2類に壺b類が伴うと考えられる。これらを大きく器台a・b類と壺a類を1期，器台c1・c2類と壺b類を2期，器台d類を3期として時期を検討してみよう。

まず，3期の小田茶臼塚古墳について，柳田氏は，前方部方向で祭祀を行うにも関わらず，石室が反対方向にあること，石室前から出土した須恵器が墳丘の祭祀の須恵器の内では新しい型式であること，墳丘の土器群がくびれ部を意識していることから，くびれ部付近に横穴式石室の存在を想定している[70]。しかし，出土状況が「ほぼ直線的に1列に並び，その方向は墳丘主軸に完全に直行し」，配置が「ほぼ均等である」こと，「原位置で破砕された状態のまま[71]」で，器台も5号甕を中心に散乱していたことから，柳田氏の2つの石室に対応させなくても，生産時期が近接し，墳丘に置かれた時期も近いとも推定できよう。このような点から，朝倉窯系の小田茶臼塚古墳a・b式の甕は，柳田氏の述べるように，陶邑I型式1段階とするよりも，胴部下半がすぼまり陶邑I型式2段階並行としたほうがよいであろう。また，器台の脚が高くなることもそれを示唆するであろう。陶邑窯系の小田茶臼塚古墳c式の甕は，陶邑I型式2～3段階とすべきであろう。それは甕の中に入れられていた瑞が，陶邑窯系で，陶邑I型式3段階であることからもいえよう。ただ，2号大甕のように底部に絞り目技法の痕跡が見られ，叩きをナデ消し，胴下半部が膨らむ例は，小田茶臼塚古墳でも古く，前代につながる形態である。なお，小田茶臼塚古墳の時期に並行する吉武遺跡SK 28では陶邑I型式2～3段階の坏，高坏が出土している。

次に2期の中で隈平原2号墳では，朝倉窯系の壺b類と陶邑I型式2段階の甕が共伴しており注目される。東尾大塚古墳でも壺b類と陶邑I型式2（～3）段階に並行する坏蓋が共伴する。また，石人山古墳にも陶邑窯産の甕が伴うことが指摘されている[72]。古寺D—10ではb類の壺とカップ形が共伴（第6図10～12）するが，類似するカップ形が，樋渡26—1調査区SH—01土壙[73]から出土し，そこには陶邑I型式3段階の坏が伴う。佐賀市鈴熊ST 001古墳[74]からは，朝倉窯系と陶邑窯系の瑞が共伴するが，朝倉窯系の瑞は1期の池の上6号墳の瑞と比較し，口縁の開き方にやや違いがあるものの，類似する器形が出土している。共伴する陶邑窯系の瑞はI型式2段階であろう。山隈窯では4基の窯が確認されたということから，窯の特定は不明確であるが，器台脚部に見られる刻線の系譜を引いたと考えられる，刻線を持つ有蓋高坏（第5図22）が見られる。三方透しでやや長脚化し，波状文も櫛を傾けて施文しており，形態から見る限り新しく，陶邑に並行させるならば，I型式3段階並行かそれ以降であろう。それに対して，山隈窯出土の樽形瑞

（第５図25・26）は，胴中央と側面の径の差が少ない特徴があり，陶邑と比較するならば，TK 73号窯に見出せよう。このように，山隈窯跡群の操業期間はやや長いようである。

１期の中でも古いと考えた古寺D－６には，５点の有蓋高坏が伴うが，四方透しが含まれ，蓋の稜部の張り出し，坏部口縁の傾斜角度などを陶邑窯の製品と比較すると，陶色Ⅰ型式１段階に近いと考えられる。

池の上墳墓群D－４からは，朝倉窯の製品（第７図12）が墓壙上面から，陶邑産の製品（第７図13・14）が棺内から出土するが，橋口氏はⅣ式として伴うと考え，柳田氏は前者を柳田氏のⅠ式，後者を柳田氏のⅢ式と考え，時期が違うものとした。すなわち，橋口氏の考えは朝倉窯産の池の上遺跡最終末の製品と陶邑の製品が共伴する。柳田氏は池の上の製品をⅠ式からⅡａ式にして，池の上D－４の須恵器のうち朝倉窯産をⅠ式に，陶邑産と考えられる製品をⅢａ式とし，その間に小田茶臼塚古墳Ⅱａ～Ⅲａ式を置いている。[75] 中村勝氏も同様の考えで，墓壙上面の朝倉窯の製品にA型とC型の波状文が施文されることから氏のⅠｂ期とし，陶邑産をTK 208型式並行のⅢａ期に置いている。[76] やはり，D－４の朝倉窯産の須恵器は壺ｂ類で陶邑Ⅰ型式２段階に並行し，陶邑産は陶邑Ⅰ型式３段階であり，時期の違うものと考えた方がよいであろう。

以上を整理すると，朝倉窯系と陶邑窯系との並行関係は，１期が陶邑Ⅰ型式１段階，２期がⅠ型式２～３段階，３期がⅠ型式（２～）３段階となり，２期と３期が近い時期となろう。

## 3　初現期須恵器の系譜

須恵器の系譜については，かつて古墳出土の須恵器研究を行っていた段階では，初現期の須恵器が不明確であったため，その源流は百済，新羅あるいは伽耶などが上げられていた。その後，陶邑窯跡群や一須賀窯跡群が調査され，伽耶との関わりが明らかにされてきた。さらに，福岡県甘木市を中心とする朝倉窯跡群や韓国の調査が進展して，伽耶の中でも地域差まで指摘されるようになってきた。

具体的には陶邑窯跡群について，田辺昭三氏は咸安，[77] 中村浩氏は伽耶，百済，新羅系の伽耶，[78] 申敬澈氏はTK 73・85号窯を陜川，高霊と指摘された。[79] 武末純一氏は，器形により系譜の違いがあり，新羅，伽耶，百済の影響があり，慶尚道を中心としながらもさまざまであるとした。[80]

一須賀２号窯については中村浩氏は新羅地域に近い伽耶か新羅とした。

朝倉窯跡群について中村浩氏は伽耶，申敬澈氏が咸安，固城，泗川，西谷正氏は釜山華明洞から咸安の南岸地域，内陸部に入った陜川，義昌をあげ，[81] 武末純一氏は伽耶でも西側の限られた地域とした。

各窯跡の系譜を考える前に，各窯跡の特徴について触れてみよう。

大庭寺窯跡については，器種はTG 232号窯から平底坏がわずかに出土し，瑕も少なく，樽形瑕は見られない。甕は底部中央に絞り目を持つもの，口縁部中位に突線を巡らすものがある。高

坏は種類が多いものの，有蓋高坏の蓋にはほとんどに櫛歯文を施す。また，脚部の透しは，円形，三角形，長方形，菱形，多窓，わずかに二段がある。器台は，波状文，鋸歯文，格子文，櫛歯文，集線文のほか組紐文もある。瓶は丸胴ですでに波状文が施される。カップ形には波状文を施すものと施さないものがある。

TK 73・85号窯では坏が多くなり，瓶，樽形瓶も多い。大甕には絞り目は見られず，坏や高坏の蓋にも櫛歯文はない。高坏の透しは無窓か円形が知られているが，細片の中に四方や多窓が存在することが確認できた。器台は脚裾が開かず，波状文が主体である。

狐池南遺跡の窯跡では，公表された資料によれば，蓋には櫛歯文の存在が確認でき，上代窯跡と同様稜部が突出しない。小型の樽形瓶には注口部に長い管が付くことが特色であり，現在まで未見の資料である。(82)

上代窯跡（第5図1～7）では坏類が出土するが，蓋受け部が外へ突出しない。また，蓋には櫛歯文を施す。瓶は波状文を施し，高坏は箆で刺突した小さな透かしがある。(83)

一須賀2号窯では量も少ないため問題は多いが，坏や瓶，樽形瓶は確認されていない。器台にはわが国の窯跡例では唯一のコンパス文があり，擬組紐文と崩れた鋸歯文が見られる。

吹田32号窯でも出土量，器種とも少なく，坏や瓶類は確認されていない。器台に鋸歯文，格子文，櫛歯文，波状文が組み合わされる。

三谷三郎池西岸窯跡も出土量，器種とも少ないが，大甕の底部の絞り目は，大庭寺窯跡とともに大きな特徴である。また，甕の口縁部には集線文，高坏には三角透しがある。

朝倉窯跡群では調査された山隈窯跡群を中心に，小隈，八並窯跡群，池の上，古寺墳墓群から見てみると，坏が存在せず，大甕底部に絞り目を持ち，口唇部下の突線が陶邑窯跡群や大庭寺窯跡などに比べ，口唇部から離れる傾向にある。器台は鉢部が膨らみ，口唇が大きく外反し，脚裾部は大きく開く。櫛歯を施文方向に直行になるよう動かしながら施文した波状文が，他の窯にない特徴であり，この波状文は壺にも見られる。器台の透しは長方形が多く，三角形も見られる。カップ形には基本的に波状文は見られない。

このような初現期の須恵器の特色を，朝鮮半島の陶質土器と比較し，その系譜について検討してみよう。

**大庭寺窯跡**

まず，大庭寺窯跡ではTG 231号窯とTG 232号窯の2基の窯が発見されており，後者の灰原が完掘されたが，この灰原から多量の出土品を見るものの，坏がわずかしか出土していないことは，当時の半島の特に新羅，伽耶における陶質土器の器種組成と同じである。また，瓶がわずかで，樽形瓶が出土していない状況は，半島における全羅南道と共通性がないことを補強している。

続いて大甕の底部の絞り目は，郭鍾喆氏の集成(84)によれば，慶尚南道東部に多いことが指摘されているが，ソウル夢村土城をはじめ全羅北道竹幕洞祭祀遺跡でも出土しており，慶尚南道以外でも確認されつつある。しかし，器形等の比較からは伽耶との共通性が強い。ただ問題は大庭寺で

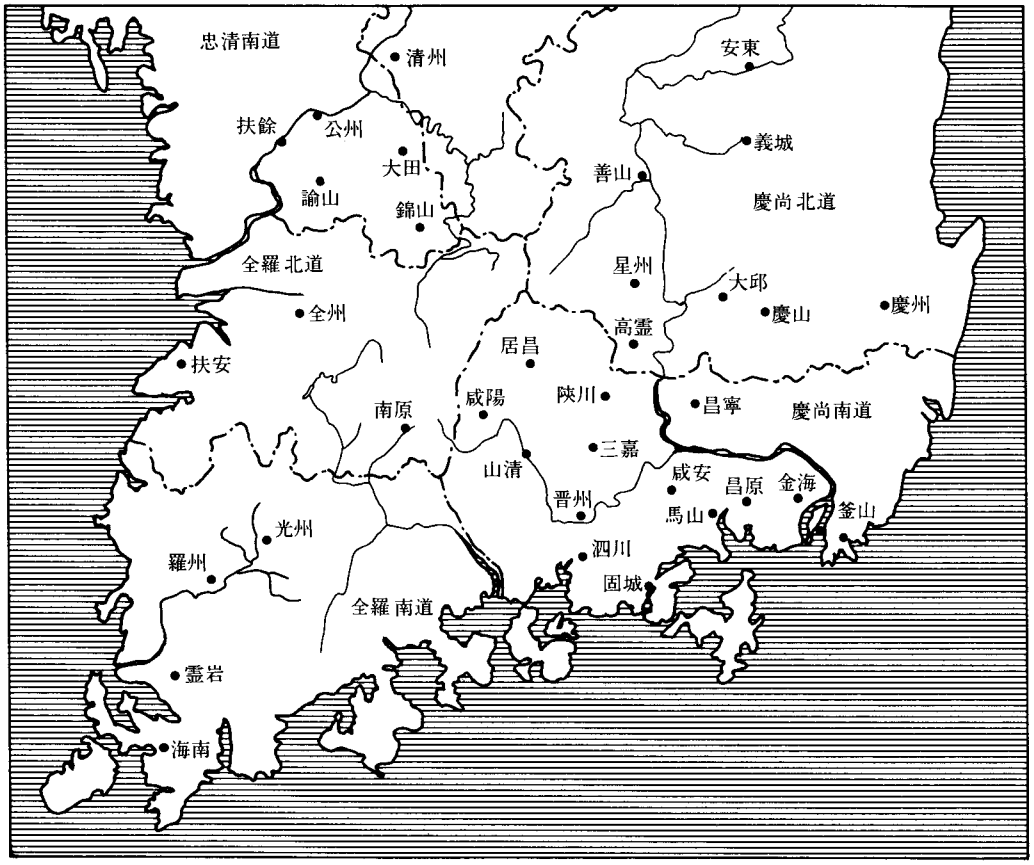
は400個体以上確認された大甕の中には，肩部に乳頭状の突起を付けるのは1点しか見られないことである。乳頭状突起は，わが国で出土した和歌山市鳴神遺跡，岡山県押入西1号墳，香川県垂水遺跡などにあるものの，わが国で生産されたことが明らかな初現期の窯跡出土品には見られない。これに対して，半島の5世紀中葉以降といわれる福泉洞10号[85]，53号墳[86]，あるいは玉田M1号[87]，M3号墳[88]などにも見られ，新しい時期まで存続しており，わが国との違いは注目すべきことで，時期的な問題ではなく，わが国において取捨選択が行われた可能性もある。

大庭寺窯跡の蓋のほとんどに櫛歯文が見られる（第2図1）。この文様は新羅，伽耶と広く分布するが，5世紀中葉以降の大伽耶（高霊）を中心とする地域では，一般的に見られる。しかし，大伽耶とは直接的なつながりを求めなくてもよいと考えることは，大伽耶では5世紀前半の資料が不明確であること，大伽耶では櫛歯文の蓋は有蓋長頸壺と二段透しの高坏にみられるが，わが国の生産地ではこの共伴例はないことからもいえよう。5世紀前半代の例として，金海大成洞1号，11号墳では，長方形透しであるが，短脚で坏部も大庭寺窯跡に類似する高坏に，櫛歯文の蓋が伴うことから，この有蓋短脚高坏も大庭寺窯跡に影響を与えた候補の一つであろう。なお，申敬澈氏は，大成洞2号墳出土の櫛歯文を持つ蓋と有蓋長頸壺が，大伽耶の形態と類似することについて，大伽耶文化の本来の基盤は金官伽耶文化にあり，これが大伽耶へ移ったとする[89]。この見解については，今後検討すべき重要な問題である。

大庭寺窯跡の高坏は短脚一段透しの例が多く，透しを含め，器種の多様さが注目される。まず，三角透しは趙榮濟氏が述べるように，慶尚南道西部に多く見られ，氏は形態上の共通性がほとんどないⅠ段階，定型化したⅡ段階を設定して，Ⅰ段階には西部慶尚道を中心に広く，Ⅱ段階は晋陽を中心にその周辺だけ集中するとし，この分布の変化について，高霊の大伽耶勢力の急速な膨張と，それに伴う大伽耶連盟の形成によって，この連盟に含まれない伽耶集団の版図の萎縮から始まるとし，三角透しを基盤とした伽耶集団を想定している[90]。この三角透しを大庭寺窯跡例（第2図2）と比較すると，脚部の形態，透しについては類似するものの，坏部に違いが見られるため，今後も検討が必要である。

菱形透しについては，TG 232号窯に無蓋高坏で菱形が縦に並ぶが貫通しない例と，横に巡り裾部が大きく屈曲して「八」の字状に開く2器種ある（註(6) P. 69図）。菱形透しは和歌山市楠見遺跡，鳴神遺跡，堺市小坂遺跡など須恵器出現期の段階に知られているが，窯跡資料の香川県宮山窯跡にも見られ，いずれもが無蓋高坏で半島例と共通している。後者の屈曲して「八」の字状に開く例は，楠見，鳴神，宮山例が上げられるが，半島においてはTG 232号窯跡の前者の類例は，馬山縣洞1号，5号，50号土壙墓[91]，陜川苧浦里A古墳45号土壙木棺（槨）墓[92]，陜川苧浦里B9号土壙墓，漆谷郡黄桑洞2号墳，後者の類例は福泉洞41号墳[93]などが上げられるが，慶尚南道に多いといえよう。縣洞遺跡や苧浦里古墳では菱形でなく長方形の刺突文も多いが，ほとんどが土壙墓からの出土であり，福泉洞41号墳は木槨であるが，5世紀初頭の年代が与えられている。

多窓透しについては陜川玉田や昌原道溪洞12号土壙墓[94]をはじめ，新羅，伽耶地域に見られるも




**第8図**　韓国南半部の関連地名

のの，これらの集中地域はいまだ判然としない。

この他高坏で注目されるのは，坏部が丸底で口縁部が大きく外反するタイプ（註(130)図2―2・3）であるが，これは釜山槐亭洞古墳群[95]をはじめ慶尚南道東部に多くみられる器種である。

窯ではないが，TG 232号窯跡で生産された可能性のある，363―OL 土器溜まり出土の特殊な形態の高坏（第2図14）は，浅い坏部の中央が一段深くなる器形で，その祖形と考えられるものが大成洞2号墳[96]から出土する。また，この坏部を逆さにした形態の蓋が咸陽白川里1号墳[97]，慶北月城郡江東面安溪里32号墳，菊隠李養璿蒐集文化財[98]にあり，この後続形態が慶州月城路ナ―9号墳[99]にもあることから，白川里1号墳を除いて新羅系といえよう。おそらく大庭寺例は，このような蓋とも関連があり，大成洞2号墳の例から慶尚南道東部との関わりがあろう。

器台については多種多様であるが，TG 232号窯出土例（類例第2図18）では形態的には脚裾部が大きく開き，脚の基部が細く，鉢部は丸みが少なく直線的に開く特徴を持つが，口唇部下に2本の突線をつくり，鋸歯文，格子文も丁寧であるところから，福泉洞21―22号墳（第9図6），10―11号墳の伽耶系の器台が比較材料となる。大庭寺窯跡では鉢部の丸みが少ない点で新しい傾向ともいえようが，縣洞2号墓にも同類があり，地域差の可能性も今後検討すべきであろう。他

に新しい傾向として，山形（鋸歯状）波状文を施す，脚の基部が太い器台（註(6) P. 71図）は福泉洞10号（第9図11），39号墳[100]の新羅系器台と類似している。

このような新しい傾向に対して，大庭寺393—OL土器溜まり出土の器台（第2図19）は，鉢部も半球形で深く，文様も丁寧に施し，福泉洞21—22号墳[101]（第9図6）との比較が可能で，同様に筒形器台（第2図5）も釜山華明洞7号墳[102]（第9図1）とも類似するなど，古い様相も見られる。

組紐文については，関川尚功氏[103]，門田誠一氏[104]の論考があり，洛東江流域および望星里窯跡から慶州地域が故地として上げられているが，陜川苧浦里古墳群にも見られる文様である。大庭寺窯跡に関しては，他の文様を含めて考えるならば，洛東江下流域の伽耶といえよう。

集線文については釜山，慶州，陜川，大邱に広がる文様であるが，慶尚道でも東部に多い文様といえよう。

このように器台鉢部の文様は福泉洞古墳群に見られる伽耶系器台と比較できる。しかし，大庭寺窯跡の伽耶系器台は長方形透しで，段毎に交互に開けられている。福泉洞21号墳の伽耶系器台の透しが，長方形と三角形の両者存在するものの，縦列に配置しており（第9図6），21号墳出土例で新羅系の影響が考えられる1例（第9図5）だけは，長方形透し交互配置である。さらに福泉洞10号墳では，伽耶系の1例が長方形透し縦列配置であるのに対して，新羅系は1例を除いて8個体は長方形透し交互配置であった（第9図11）。このように福泉洞古墳群出土例から，三角形で縦列配置が伽耶系，長方形交互配置が新羅系といえることから，大庭寺窯跡の器台は，透しの形態と配置から，一部すでに新羅の影響を受ける伽耶系といえよう。そのことは，2例の鉢部に山形（鋸歯状）波状文を施す，新羅系器台が含まれていることからも想定できる。

大庭寺窯跡の器台は文様などから総合的に判断するならば，釜山，金海，馬山を結ぶ海岸沿いに系譜が求められるが，新羅系の要素を含むことについては，新羅の勢力が釜山周辺に及んだため，伽耶土器が新羅の影響を受けたようで，それが大庭寺窯跡へ及んだと考えられ，直接的に新羅からの系譜を考える必要はないであろう。

瓶についてはTK 73号窯をはじめ，より古い段階の資料（第3図8・19）は胴部の下位がすぼまるイチジク形となり，文様を施さない傾向にあったが，大庭寺窯跡では球形に近く，頸部に波状文を描く例（註(6) P. 69図）があり，今日までの瓶の系譜と違いを見せている。TK 73窯跡以降に多い樽形瓶（第3図10・20）が出土しないこととも関連して，他器種から見た伽耶地域との関連から，大庭寺窯跡に伝わる前の伽耶地域に存在した瓶であった可能性がある。

カップ形については，TG 232号窯の例は波状文を持つものと持たないものがある（註(6) P. 69図）。半島に類例を求めると，前者の例として馬山縣洞57号土壙墓例が類似し，後者は縣洞5号，50号，60号土壙墓，福泉洞41号墳に類似している。また，大庭寺393—OL土器溜まり出土例（第2図15）も文様はなく，馬山縣洞50号土壙墓，新村里II遺跡に類似している。

393—OL出土の有蓋把手付台付壺（第2図17）は，慶尚南道一帯に広く出土するものの，東と

西では形態に違いが見られ，大庭寺例は壺の下位がすぼまることから東部の形態である。わが国にも出土例は多いが，小型品で口縁部が外反する特徴は藤井寺市野中古墳[105]，橿原市四条大田中遺跡例[106]に類似する。半島においては，馬山縣洞61号土壙墓が類似するであろう。

以上のように現在までに判明した大庭寺窯跡の出土品の系譜は，馬山，昌原，金海，釜山にかけての沿岸地域であろう。

**陶邑窯跡群**

陶邑 TK 73・85号窯では坏や瑳，樽形瑳が一定量見られることが特徴として上げられるが，坏や瑳の多く出土する地域は伽耶でも西部であり，大庭寺窯跡に比べ量的に増大することは，さらに西の全羅南道との関連も考慮に入れるべきかもしれない。

半島における瑳，樽形瑳の出土地域が栄山江流域を中心とした全羅道に多いことはTK 73・85号窯の器種組成にこの地域との関連が見て取れよう。また，大甕は伽耶の器形であるにも関わらず絞り目を持たない特徴は，前述した郭鍾喆氏の集成でも知られるように，慶尚南道東部以外の地域との関連の強いことが想定できよう。さらに大きな特徴として，坏などの蓋（第3図1・12・16）に櫛歯文が見られないことは，慶尚南道でも西部との関連が強いといえよう。しかし，円形透し（第3図7）については地域は限定できず，多窓透しと考えられる資料が確認できたことは，今後系譜を考える上に重要な資料となろう。

器台（第3図11・21）については波状文が主体であり，脚裾部が直線的に開き，ここにも大庭寺窯跡と大きな違いが見られるが，半島の全羅北道竹幕洞遺跡に類例があり，この地域との関連が注目される。

このような点から陶邑 TK 73・85号窯は，大庭寺窯跡と地理的にも時間的にも近接しているにも関わらず，系譜の違いが明確で，慶尚南道でも西部から全羅南道も含めた地域との関わりが強いようである。

さらに次型式の TK 216号窯，あるいはⅠ型式2段階の様相を見ると，有蓋双耳壺の存在，つまみを持たない蓋坏の存在と量産，瑳，樽形瑳の量産など全羅南道との関わりが見られる[107]。このように陶邑窯跡群は系譜的にも大庭寺窯跡の直接的な系譜の延長上になく，TK 73・85号窯の段階には慶尚南道西部から全羅南道にかけての関わりが強いが，後に全羅南道の影響がより強くなったといえよう。

**上代窯跡**

蓋（第5図1・2）には櫛歯文が見られるが，蓋の天井部の稜がほとんど突出せず，また，坏身（第5図3・4）の蓋受部も半球形の底部から外方へ突出することはなく，口縁の立ち上がりもいったん大きく内側へ入り，外反して立ち上がる。この形態は狐池南遺跡窯跡の高坏とも類似している。

瑳（第5図6）は扁平で波状文を持つ。

系譜については慶尚南道でも西部との関連を推定するものの，わが国で変容した可能性もあり，

今後さらに検討を要する資料である。

**一須賀２号窯跡**

一須賀２号窯跡の器台にはコンパス文，擬組紐文と崩れた鋸歯文が施され，コンパス文についてはわが国でも島根県長尾古墳，福岡市有田遺跡から出土する。前者は３本単位の歯で基点を中心に正確に弧が描かれているが，後者は竹管状工具で２本単位のコンパス文がフリーハンドで描かれる。福泉洞21号墳（第９図６）では基点を中心に正確にコンパス文が描かれるが２本単位である。コンパス文は，亀田修一氏が指摘するように慶州に多いが，いずれも５世紀後半以降で，金海でも礼安里39号墳[108]の新羅系器台に見るように，新羅系は時期的に新しいようである。また，新羅系は２本単位で描かれている。国立晋州博物館展示図録掲載の火爐形土器[109]は長尾古墳と同様に３本単位で整然と描かれる。一須賀２号窯もこの３本の系譜を引くが，篦でフリーハンドで描くことから後出するであろう。このコンパス文は，慶州および釜山を中心とした慶尚南道東部に系譜が求められよう。

組紐文は大庭寺窯跡の項で触れたように洛東江流域から慶州，陜川に見られる。

以上から一須賀２号窯は慶尚南道でも東部の地域で，大庭寺窯跡よりも慶州の影響がより強いと想定される。しかし，コンパス文も篦で１本ずつ描き，組紐文も別々の波状文を重ねた擬組紐文であることから，どこまで半島の系譜を保っているのか問題も多い資料である。

**吹田32号窯**

吹田32号窯の器台の鉢部は深く半球形で，口唇部内側にも稜がまだ明瞭に作り出されるなど，古い様相を持つ。同様に鋸歯文を上下に組み合わせる文様も古い様相である。この鋸歯文，格子文，櫛歯文の組み合わせは大庭寺窯跡とも類似しており，釜山，金海に分布する器台にその系譜が求められよう。

**三谷三郎池西岸窯跡**

この窯では大甕の絞り目が特徴であり，大庭寺窯跡の項で述べたように，慶尚南道東部地域との関連があり，同じく前述した甕の集線文も同一地域との関わりがある。

また，高坏の三角透しは，前述した趙榮濟氏の論考から慶尚南道西部に分布が見られるが，脚部の形態が大庭寺窯跡と類似することから，その系譜は慶尚南道東部の地域が該当しよう。

**朝倉窯跡群**

朝倉窯跡群では坏が継続してほとんど作られなかったことが大きな特色といえ，この点では大庭寺窯跡と同様，新羅，伽耶における器種組成と同じである。ところが畿内では陶邑窯跡群に移り，すぐに坏の量産化を始めるが，朝倉窯跡群では依然坏の生産を指向せず，この点が両地域の系譜を考える上での参考になろう。

大甕（第６図７）に絞り目を持つ特色は，大庭寺窯跡，三谷三郎池西岸窯跡と共通するが，口縁部の外傾角度，口唇部下の稜線の位置に違いが見られ，伽耶の中でも大庭寺窯跡などと系譜の違いが想定できる。

器台については，文様の主体が波状文であるが，一部櫛歯文も見られる。大きな特色は波状文の施文方法で，櫛歯を施文方向に直行になるよう動かしながら施文するが，この波状文は櫛歯の動きがコンパス文の描き方と同じである。中村勝氏はA型波状文としている。この文様は器台だけでなく，壺にも見られるが，半島においては慶尚南道に見られる施文方法である。釜山では福泉洞10号墳の段階まで残存しており，昌原道溪洞12号土壙墓や陜川鳳溪里18号土壙墓[110]など広く見られる。慶尚南道の例と比較したとき，朝倉窯跡群の方が櫛歯の進む距離が短いため，前の文様に重なっている。池の上6号墳や，山隈窯跡に代表される口縁部がいったん内側へ屈曲してから大きく外反する器台には，特にこの波状文が施文されるが，この特異な口縁部の形態は，昌原道溪洞12号土壙墓や陜川苧浦里古墳群に多く見られる火爐形器台との関わりを想定してみたい。このように考えると，特異な波状文を施す壺（第7図6・11）のいずれもが平底化している特徴が，半島において陜川苧浦里古墳A1号石槨，25号土壙木棺（槨）墓，陜川鳳溪里78号墳，馬山縣洞64号石槨などに見られ，時期的に問題もあるが，同一系譜上にあると考えてよいであろう。さらに聰（第5図24，第7図5・15）も同様に平底化しており，量的にも多く見られ，樽形聰も初期から生産しており，慶尚南道西部から全羅南道を一部含めた地域と関連があろう。

高坏の大きな特色の一つは，蓋に櫛歯文のないことで，聰，カップ形と共通する特色で，慶尚南道西部を中心とした地域に限定できよう。高坏の透しはないものも散見するが，池の上6号墳の長方形以外は三角形透しが多い。大庭寺窯跡例や趙榮濟氏の集成資料と比較すると，朝倉窯跡群は三角形の透し孔の幅が広い特徴がある。しかし，朝倉窯例は透しの下に段を持つ例（第6図5）と持たない例（第6図2・4）があることは，趙榮濟氏の集成と共通し，さらに古寺D—6の高坏脚部の坏部との接合部に見られる低い突線（第6図5）は，晋陽晋城面下村里，晋陽集賢面新塘里の高坏に見られ，この地域との関連が強いといえよう。

カップ形はすべて無文で，陜川玉田11号墳，河東古梨里ナ10号墳[111]，あるいは馬山縣洞60号土壙墓に類似する。

これらから，朝倉窯跡群の系譜を考えると，慶尚南道西部でも陜川，晋州を中心とした地域で，あるいは馬山や全羅南道の影響も一部受けている可能性もある。

西谷正氏は，朝倉窯跡群の系譜を「洛東江河口付近から，そこに続く南岸と一部の内陸地域が注目される」とし，朝倉窯跡群に蓋坏が少なく，陜川の玉田古墳群には坏が多いことから，「咸安邑から華明洞に至る南岸地域および一部内陸の諸地域では蓋坏の出土をほとんど見ないこととも対比され，参考になろう[112]」とした。しかし，このような地域では逆に高坏の櫛歯文が多く，聰，樽形聰の少ない地域であり，問題も残している。地域的にもっと狭く限定する武末純一氏は「その祖型となる陶質土器が，伽耶でも西側のどこかに，そのまま一まとまりで埋まっているのではないかと想像させる[113]」としており，今後さらに検討すべきであろう。

## 4　須恵器生産の開始年代

須恵器の生産開始の年代の検討については，『雄略紀』の今来才伎の中に「新漢陶部高貴」あるいは『垂仁紀』の近江国鏡谷の工人の記述から始まった。その年代観は5世紀末，5世紀後半などであった。

森浩一氏は窯などの調査から4世紀末とする年代を発表され[114]，同じく陶邑窯跡群を調査された田辺昭三氏はTK 73号窯に5世紀中葉から後半の年代を与え，一須賀2号窯はそれを遡るとした[115]。しかし，現在まで絶対年代を決定する資料はない。

近年では須恵器年代の論拠に使われる資料として埼玉稲荷山古墳の鉄剣があり，白石太一郎氏[116]，都出比呂志氏[117]は鉄剣の辛亥銘の471年と，ここから出土したとされるTK 23，あるいはTK 47型式の一括須恵器の検討から，須恵器の始まりに，5世紀初頭から4世紀末の年代観を示された。

このような陶邑窯跡群を中心とした須恵器生産開始の年代検討に対して，九州においても初現期の須恵器が確認されるようになり，甘木市池の上墳墓群，古寺墳墓群を調査した橋口達也氏は，池の上墳墓群の初期須恵器を，壺の口縁の形態や波状文の精粗から，4形態に分類し，それをⅠ～Ⅳ式に設定し，Ⅰ式に井上裕弘氏編年の下原遺跡出土土器群（布留式並行期）に伴うとし，Ⅱ式に老司古墳3号石室から出土する馬具，金環等のセットと同様の馬具，金環が伴っていること，また池の上Ⅳ式に陶邑Ⅰ型式2～3段階が共伴することから，池の上Ⅲ式に陶邑Ⅰ型式1段階が並行関係となるなどから，池の上Ⅰ式を4世紀後半まで遡るとした[118]。

これに対して柳田康雄氏は，橋口氏が分類の基礎とした壺の口縁の変化は小差であること，他のカップ形や高坏，器台も同様であること，池の上Ⅱ式に共伴した土師器甕は5世紀初頭ではなく5世紀前半のものであること，Ⅱ式に伴う馬具と金環については5世紀初頭とは限らず，5世紀前半以後に位置づけてもよいことや，墳墓群が継続して作られたとは限らないとして，Ⅰ～Ⅲ式は5世紀前半代に含まれるとした[119]。

中村勝氏も氏の分類によるA型波状文が池の上Ⅰ～Ⅳのいずれにも含まれ，橋口編年の年代観でおよそ50～70年もの時期幅が与えられており，同一工人固有の文様とするならば，時期的な幅はきわめて制約されると疑問を出された。そして，筑紫での須恵器生産の開始は限りなく4世紀に近い5世紀代とした[120]。

佐賀県にも朝倉窯跡群の製品が見つかり，蒲原宏行氏らは，朝倉窯系の柳田氏のⅠb式と陶邑TK 216型式の共伴例として東尾大塚古墳，隈平原2号墳，鈴熊ST 001古墳を上げ，Ⅱa式とON—46段階の共伴例として鈴熊ST002号墳，小田茶臼塚古墳例が上げられるとして，「Ⅰa式とⅠb式の一部はTK 73型式に並行する」として年代を土師器の編年にてらして，420年代とした[121]。

西谷正氏は，山隈窯跡群の調査により5世紀前半と述べ[122]，そこで実施された熱残留磁気年代測定の分析結果は，AD 450±10年であるという。

小田富士雄氏は，池の上Ⅳ式に比定されているD—4出土の陶邑産の瑯と壺について，橋口氏が陶邑Ⅰ型式2～3段階としたのに対して，3～4段階とすべきとして，朝倉窯跡群の上限を5世紀第2四半期代とし，第1四半期のどこまで上りうるかとした。(123)

このように朝倉窯跡群の年代は，橋口氏の4世紀末に対して，5世紀前半代の考えでまとめられるが，5世紀前半代でもどこに置くかが今後の争点となろう。

さて，大庭寺窯跡や朝倉窯跡群が発見されたことにより，須恵器生産開始の年代観も遡っているが，まず大庭寺窯跡について検討してみよう。大庭寺窯跡と陶邑TK73号窯についてどちらが古いかとした時，大庭寺窯跡を上げうるであろう。筆者のように両者の系譜が違うという見解をとるものも同様であることは，半島と類似した形態がより多く見出せることにある。

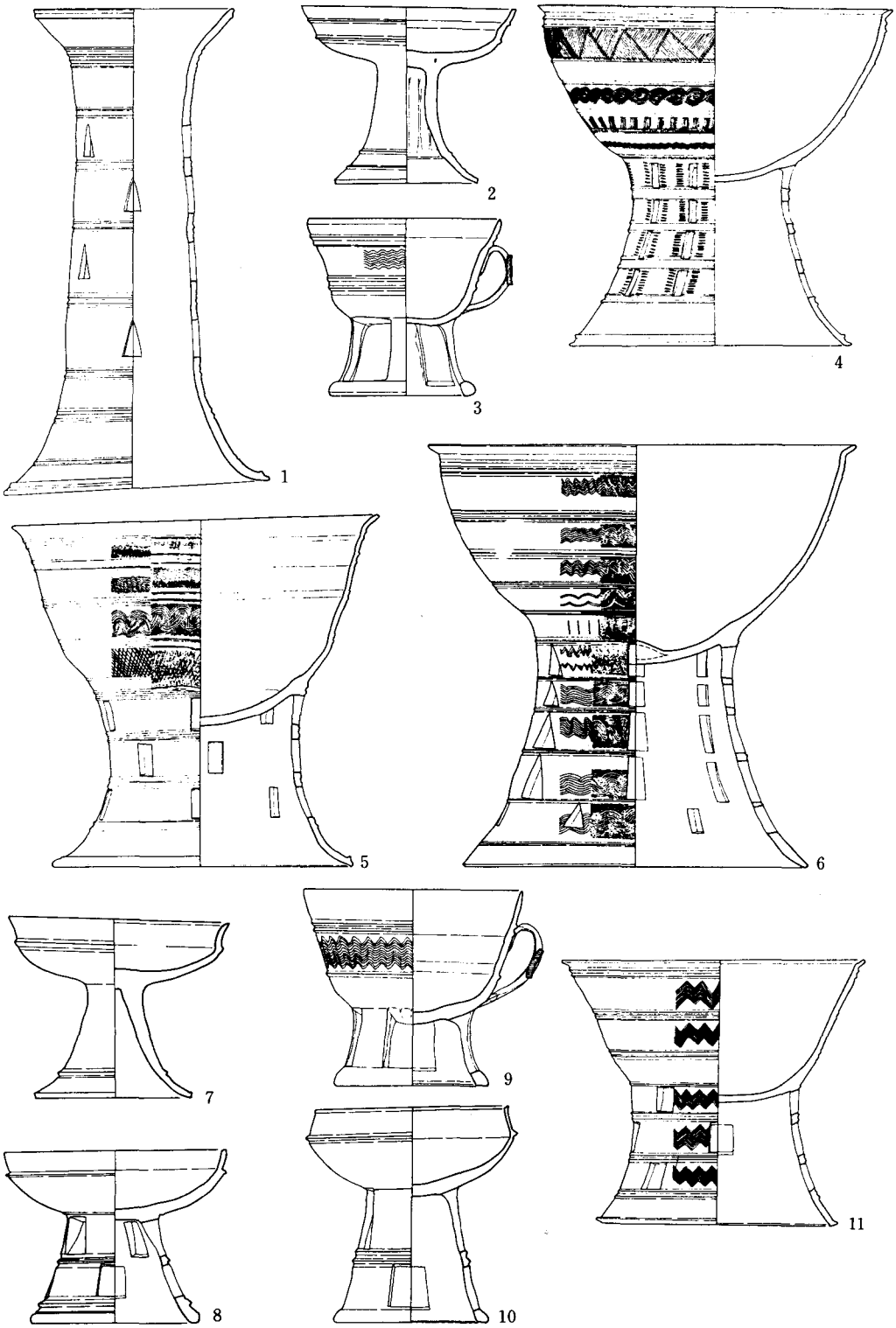
大庭寺窯跡の資料を半島に求めた場合，高坏，器台，カップ形などが上げられよう。まず，釜山の申敬澈氏の編年(124)を参照してみよう。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 4世紀後半 | c | 大成洞3・23　福泉洞54<br>大成洞2・39 |
| 400 | 福泉洞31—32　35—36　華明洞7号墳 | | d | 大成洞1・7・8・11<br>福泉洞31・32・35・36・25・26 |
| 420 | 福泉洞25—26　21—22 | | | |
| 440 | 福泉洞8—9　10—11 | | | |
| 460 | | | | |

福泉洞・大成洞古墳群編年表（左は註（124）a，右は同b）

大庭寺窯跡と朝鮮半島の器台を比較すると，筒形器台は華明洞7号墳と類似するものの，1例だけである。高坏形器台は，鉢部の体部が直線的に立ち上がるものの，文様や脚の基部が締まり細くなる点など，福泉洞古墳群の伽耶系の器台と比較できよう。

大庭寺窯跡の器台脚部の区画は3～4段が多いが，福泉洞古墳群の伽耶系器台は21号墳では4～5段，10号墳では5段，53号墳では4～6段に対して，新羅系器台はいずれも3～4段が主体である。また福泉洞古墳群の伽耶系器台（第9図4・6）の多くが長方形あるいは三角形透しで縦列配置であるが，新羅系になると長方形で交互配置（第9図11）になる。大庭寺窯跡では長方形透しで交互配置であり，大庭寺窯跡の器台は伽耶系であるが，すでに新羅系の影響が加わっていると考えられる。事実，大庭寺窯跡にはわずかに新羅系の器台があり，脚の基部が太く，鉢部が直線的に開き，鉢部には二段に山形（鋸歯状）波状文が施される。これは福泉洞10号墳（第9図11）や39号墳に類例が見られる。福泉洞古墳群の器台を見ると，新羅系は21号墳に1例あり，10号墳では主体的である。大庭寺窯跡の器台と福泉洞21号墳の伽耶系器台と比較すると，21号墳では鉢部が丸いのに対して，大庭寺窯跡では直線的に立ち上がる例が増えている。また，器高が福泉洞21号墳が40～50cmと大型であるのに対して，大庭寺窯跡では30～35cmと小型になる。ちなみに福泉洞10号墳では30cm前後が主体である。このような新しい様相に対して，大庭寺窯跡では，口唇部下の突線は明瞭に作り出され，福泉洞21号墳あるいはそれ以前の福泉洞31号墳(125)に比較し得




**第9図**　韓国出土の陶質土器　(縮尺1/5，1・4～6・11，1/7.5)
1，釜山華明洞7号墳　2～4，東萊福泉洞31号墳
5～8，同21号墳　9～11，同10号墳

る例がある。特に大庭寺363—OL土器溜まり出土の器台（第2図19）は，鉢部も半球形で深く，文様も精緻で古い様相がみられる。

大庭寺窯跡の有蓋高坏は，三角あるいは長方形透しを持つ中に，大成洞1号墳，11号墳に類似した例がある。大庭寺窯跡の方が脚が細く，透しも狭いが，坏部は酷似している。また，縦列の菱形透しの高坏や，カップ形は馬山縣洞遺跡において土壙墓から出土する例が多く，古い傾向がある。それに対して1例であるが，新羅系の二段透し交互配置の高坏がある。

申敬澈氏は，福泉洞31—32号墳，35—36号墳に高句麗から移入されたと考えられる馬具・甲冑類が大量に出土することについて，「広開土王碑文」の庚子年（400年）に高句麗が任那加羅まで南征したことを根拠に，31—32号墳の段階を400～420年，21—22号墳は420～440年，10—11号墳は440～460年とする（福泉洞・大成洞古墳群編年表）。

宋桂鉉・安在晧両氏はB類高坏[126]の下限について，Ⅲ期の下限を「釜山・金海地域で慶州式土器一色になる時期」とし，『三国史記』では「訥祇麻立干17年（433年）には高句麗の圧力を排除するために百済と同盟を締結するようになり，また訥祇麻立干19年条には『修葺歴代園陵』という記事があり，430年代には新羅は勢力成長と王権の伸長を成しとげ（中略），周辺地域への本格的な領土拡張を図るようになるものと思われる」とした。その反映が釜山五倫台9・10号墳，東萊福泉洞10・11号墳とする。このことから「Ⅲ段階の下限が430年代後半～440年代初」としている[127]。

大庭寺窯跡には釜山，金海を中心に一部昌原に多く見られる，宋桂鉉・安在晧両氏のB類高坏が出土しないことは，上限をこの消滅以降と考えられよう。新羅系の高坏等が増加するのは，福泉洞21—22号墳（第9図8）の段階であるが，21—22号墳の器台の1例に見るように，文様は伽耶系，器形や透しが新羅系の影響を受けた製品（第9図5）が作られる。次の福泉洞10—11号墳は，ほとんどの器種が新羅系（第9図9～11）である。このことから，新羅系の主体になる前が大庭寺窯跡の時期といえよう。すなわち福泉洞21—22号墳を上限とし，鋸歯状波状文の存在から10—11号墳の段階に一部かかるかどうかであろう。さて，年代について，申敬澈氏らの年代観をそのまま援用できるであろうか。

新羅が伽耶まで勢力を及ぼすのは，「広開土王碑文」に見る400年あるいは407年の高句麗・新羅軍の南下や大勝以降で，福泉洞31—32号墳の段階であろうが，伽耶土器が新羅の影響を受けるのは21—22号墳の段階で，その年代は申敬澈氏の420～440年よりも早く，「広開土王碑文」の407年以降のそれほど遅れることのない第1四半期後半ではなかろうか。続く福泉洞10—11号墳は，21—22号墳と比較すると形態的に時期差が認められることから，第2四半期に置けるのではなかろうか。

大庭寺TG 232号窯では，大甕が400個体以上出土しているといわれるが，窯の規模は不明である。初現期の窯の規模は，全長が判る一須賀2号窯が全長9m，TK 73号窯が11.4m，TK 85号窯が10.5mである。幅は一須賀2号窯跡が2m，TK 73号窯が2.4m，TK 85号窯が2.6m，吹田32号窯が1.4m，三谷三郎池西岸窯が2.15m，山隈窯跡が1.7m，半島では昌寧余草里[128]窯が1.6

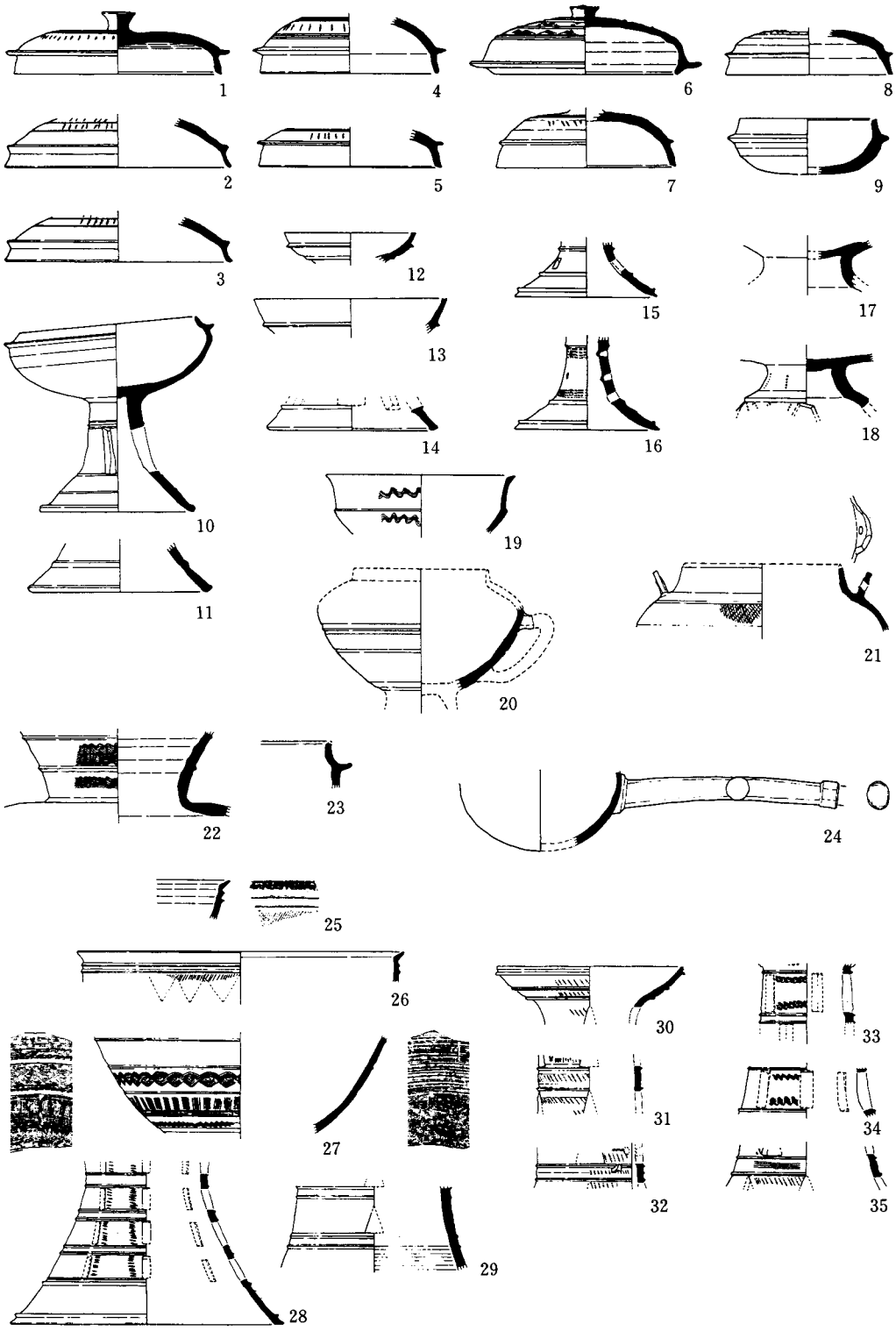
mであることから，全長10m，幅1.5～2mの窯を想定したならば，大甕だけならば2列に並べ14個は焼成できるであろう。400個を焼くとすれば約26回の窯焚きが必要であり，別の器種や393—OL土器溜まりの出土品，あるいは完成品も考慮するならば30回を越えるであろうから，仮に年1回とすれば30年以上，1年3回窯入れしたとしても10年以上操業したことが想定できる。中村浩氏の想定するように，初期須恵器の生産段階には間断なく生産が続けられていたとするならば，もっと短い期間となろう。[129] 大庭寺窯跡には器種に多様さが見られるが，これは時期差ではなく揺籃期に半島各地の工人が集められたためと考えられ，大庭寺窯跡の器台を見ると，文様のパターンは25以上確認でき，細分も可能であるが大きな時期差はないようで，1型式の中に納まるであろう。

これらから大庭寺窯跡の存続年代を推測するならば，大庭寺窯跡に新羅の影響が少ないことから，釜山・金海を中心とした地域において新羅の勢力伸長が想定される時期で，まだこの地域に伽耶系の器種の存続していた420～430年頃であろう。[130]

最近発掘された，岸和田市久米田古墳群の一辺12mの方墳[131]（以下久米田方墳とする）から出土した土器群（第10図）は大庭寺窯跡の初現を考える上に参考になる。実測されたのは40数点であるが，同一個体もあるため，坏1，蓋7，高坏6（無蓋高坏坏部2，有蓋高坏1，脚部3），小型器台1，脚台2，有蓋把手付台付壺1，同脚部1，両耳付短頸壺1，筒形器台1～2，高坏形器台2，壺1，有蓋長頸壺1，柄杓1のおよそ31個体である。

この中で注目されるのは，虎間英喜氏が指摘した[132]高坏形器台（第10図25～28）は，鉢部の組紐文，集線文，波状文の組み合わせと，脚部の横位の櫛歯文を縦列に施すところまで福泉洞31号墳（第9図4）と酷似しており，どちらにも有蓋長頸壺が共伴している。この有蓋長頸壺（第10図23）は大成洞2号墳[133]でも出土しており，この頸部にも久米田方墳と共通した組紐文が施される。このほか大成洞11号墳の器台にも組紐文が見られるが，変遷は大成洞2号墳→同11号墳・福泉洞31号墳の順である。特徴的な組紐文の中央の刺突は，大成洞2号墳が菱形であるのに対して，大成洞11号墳は縦長方形，福泉洞31号墳と久米田方墳が横長方形である。また，組紐文の施文方法は，大成洞2号墳が左方向へS字を横に組み合わせて描くとき，すでに描いた波状文の側縁を描き始めとするために，前の波状文を消すことはなく，関川尚功氏分類の組紐文ＩＡ類[134]といえる。これに対して大成洞11号墳では，2号墳と同じく左方向へ進むものの，S字の描き始めがすでに施文された部分を越え，すでに描かれたS字の櫛歯を止めたところと結合するため，あたかも前のS字と連続して描かれているように見える。前の波状文を越えなければ関川分類のＩＡ類の左撚りであるのに，越えたためにＩＢ類の右撚りになっている。久米田方墳は右方向へ進むものの，大成洞11号墳と同じく前の波状文を越えて描き始めるため，本来関川分類ＩＡ類であるのに，越えたことによりＩＢ類になっている。この施文の変遷からも久米田方墳が大成洞11号墳，福泉洞31号墳と同時期といえよう。

久米田方墳出土の土器群の生産地については，出土品の大部分に黄白色粒を含み，中でもいく




**第10図**　岸和田市久米田古墳群方墳出土土器　（縮尺1/5，25～35，1/7.5）

つか（第10図1・5・11・13・16・17・20・21・23〜26・29）は色調も灰黄色で，緑色の自然釉がかかるものがあり，この特徴は同一の組紐文を持つ大成洞2号墳，11号墳例とも類似している。このような特色を持った製品は，金海を中心に釜山にも製品が広がり，久米田方墳の製品の多くはこの搬入品である。わが国では類似した搬入品として奈良県橿原市南山4号墳の角坏付動物形高坏[135]がある。

久米田方墳の蓋の中には，大庭寺窯跡と類似した器形も含まれているものの搬入品と考えられ，久米田方墳と同時期の福泉洞31—32号墳の段階には，まだわが国では須恵器の生産が行われていなかったようで，大庭寺窯跡は福泉洞21—22号墳の段階が上限といえよう。

大庭寺窯跡はまだ半島に直結する窯ではなく，いずれ大庭寺窯跡を遡る窯が発見されるであろうが，その窯も福泉洞21—22号墳段階の中に納まるのではなかろうか。今後大庭寺窯跡より遡る，和歌山市楠見遺跡[136]の製品の生産地も問題になってこよう。

おそらく大庭寺窯跡と同類の吹田32号窯，三谷三郎池西岸窯も同時期といえよう。また，一須賀2号窯は前述したように組紐文については波状文を描いた上に再度別の波状文を交互に重ねた擬組紐文であり，狐池南遺跡窯跡や，TK 208号窯にも見られることから，時期的に大庭寺窯跡よりも後出するであろう。このことは考古地磁気年代測定で，TK 87号窯についで新しい段階に置いてあることも，検討材料にはなろう。

九州の朝倉窯跡群については，すでに前述したように福岡県小田茶臼塚古墳，隈平原2号墳，佐賀県東尾大塚古墳，鈴熊 ST 001号墳，同002号墳，礫石8号墳などでの，陶邑窯跡群の製品との共伴関係から，須恵器の生産開始は大庭寺窯跡とほぼ同時期かわずかに遡る頃であった可能性が高いと思われる。

## 5　渡来人と管掌者

ここでは特に窯の経営について問題としてみたい。渡来人は半島からどのような形でわが国へ来たのか，これについて亀田修一氏が検討されている[137]ので参照してみよう。

亀田氏は「(2)定着地への入り方」として「A．渡来人の数」「B．受け入れ側の状態」とし，Bを「①期待度」「②受け入れの場（土地など）の問題」に分け，①をさらに「a．渡来人の知識や技術などに大いに期待する場合」「b．渡来人の知識や技術などにあまり期待しない場合」とした。

土器製作工人は渡来人の中に偶然いたのであろうか。あるいは工人集団だけ，もしくは工人集団と認識されて渡来してきたのであろうか。

それは亀田氏の「(3)渡来人の意識」とも関わり，亀田氏はこれを「A．強制的」「B．自由意志」に分け，Aをさらに「a．強制連行強制配置型」「b．自由意志渡来強制配置型：特定地希望無視型」，Bを「a．特定地希望型」「b．特定地不希望型：納得強制配置型」とした。

わが国では現在確認される初現期の須恵器生産以前に，久米田古墳群方墳に見るように陶質土器について渡来品の意識があったと考えられる。このような渡来品を手に入れる意識が働いたとき，豊臣秀吉が朝鮮出兵の時の，陶工の強制連行と同じ状況が思い起されよう。この時も各藩主の領地で生産が開始されている。あるいは自由意志での渡来も考えられよう。

では5世紀前半のほぼ近い時期に，複数の地域で生産が開始されており，それが朝倉，大庭寺，陶邑，一須賀など，いくつかの系譜の違いがあることについて，どのようなことが考え得るであろうか。

宋桂鉉・安在晧両氏は新羅の勢力成長に伴う領土拡張の影響が，釜山，金海にも及んだことを説くが，それを避けたわが国への移住民の中に土器工人がいたとも考えられる。しかし，このような状況は，「広開土王碑文」に見られる400年の高句麗の南征もあり，この時期も土器の製作技術伝播の候補に上がるであろう。

この場合だとわが国においてほぼ同時期に，各地で須恵器生産が開始されたと考えられるが，どのような形で各地に工人が移住し，生産を開始したのか判然とせず，偶発的な開始となる。中央から各地に再配置したと考えることも可能であるが，中央政権が自ら積極的に新技術の導入を行っている時期に，はたして技術者の地方への配置が行われたか疑問である。

前述した，戦いで各地の首長層が連れ帰る場合だと，各地でほぼ同じ頃生産が開始されたことが想定できようが，わが国に慶尚南道から全羅南道までの広い地域の工人が渡来していることから，同時期に広範囲にわたる戦いが展開したかは問題である。おそらく当時の文物が各地域から入ってきていることからも，土器生産も戦いを含めた半島との交渉によって入って来た場合が想定できよう。

各地の工人は，当然朝鮮半島で製作していた技術で生産を開始したはずであるが，吹田32号窯，三谷三郎池西岸窯などでは，地域首長層に掌握された工人集団は，単純な組織の小集団で開始したようで，生産の規模が拡大できなかったようである。それに対して陶邑窯跡群と朝倉窯跡群では，首長層の生産の掌握，流通圏の確保を背景に，生産規模の拡大が図られたようである。朝倉窯跡群では陶邑窯跡群の製品が入って来てもなお独自性を保っていたことは，生産体制の形成が初現期には陶邑型ではなく，それぞれの首長層のもとで，独自に整えられたのであろう。

中でも大庭寺窯跡は器種構成に多様さが見られ，当時の伽耶地域の古墳出土例の多様さと比較しても，さらに広範囲の様相を持つことから，朝鮮半島の馬山から釜山にかけての工人集団の集合体といえよう。すなわち半島各地から伝わった器種，文様，技術そのままかそれに近い形で生産しており，一時期を設定した場合，各地の系譜を混在する形で包括することになる。

須恵器生産開始段階の製品を見ると，野中古墳に代表されるように，各地の中小古墳や集落に多量に入り，タコ壺や，紡錘車など日常品も見られるなど，中央政権により一元的に管理されていたとは考えられない。朝倉窯跡群においても池の上，古寺墳墓群に多くの製品が入るが，この墳墓群が渡来人集団の墓であったために，紡錘車のように半島に直結する製品が多く入ったこと

も確かであろうが，生産品の管理体制が製品を必要とするところに容易に入る緩慢な体制がとられていたのであろう。

特に陶邑窯跡群は各地の豪族が掌握した多元的生産開始の一窯跡と考えられるが，その生産は甕の失敗品400個体以上に見るように，すでに大量生産を指向していた。さらにTK73号窯など別の系譜の工人も受け入れ，陶邑Ⅰ型式2段階以降生産量は増大し，各地に供給している。これは陶邑窯跡群が中央政権中枢に近い地理的な面からも，それを背景に生産の拡大と流通圏を拡張していったようで，地域首長層である管掌者と中央政権という重層的な生産機構であったと想定したい。

## 6　朝鮮半島出土の須恵器と須恵器類似品

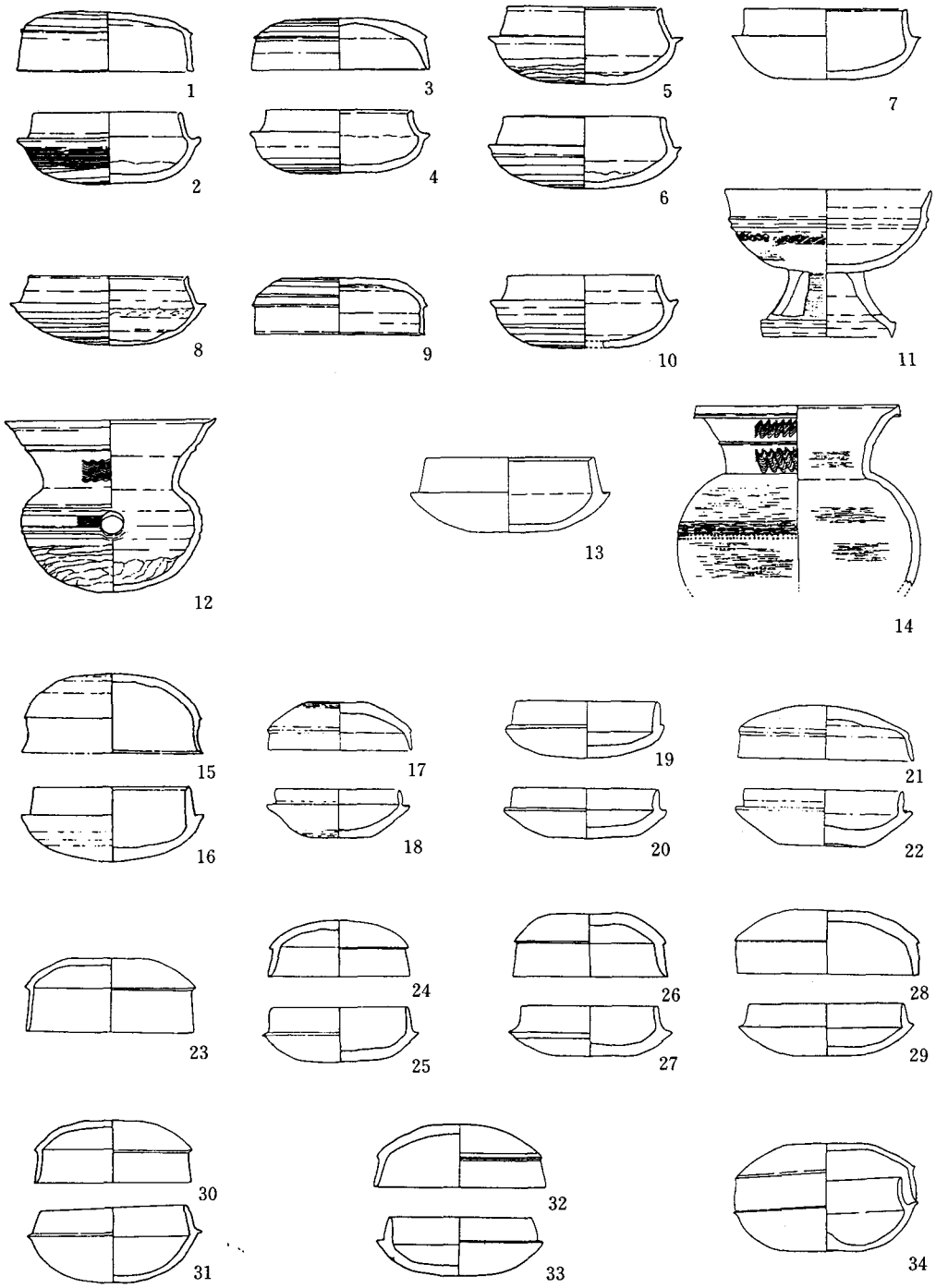
これについてはすでに別稿[138]で触れたが，要約してみよう。韓国で最近須恵器と考えられる製品が確認されている。たとえば忠清南道清州市新鳳洞B地区1号土壙墓から坏蓋2点，坏身4点（第11図1～6），同A地区32号土壙墓から坏身1点[139]（第11図7），全羅南道昇州郡松光面大谷里ハンシル住居址A－1号住居跡から坏身1点（第11図8），同A地区地表採集品の坏蓋1点（第11図9），同C地区で坏身1点[140]（第11図10），慶尚南道陜川郡鳳溪里20号墳で無蓋高坏1点[141]（第11図11），全羅南道務安郡三鄭面麥浦里（国立光州博物館蔵）の瑞1点[142]，栄山江流域出土（国立光州博物館蔵）の大型瑞1点[143]，国立扶餘博物館蔵瑞1点[144]がある。

この他須恵器類似品として釜山大学校博物館蔵伝宜寧出土瑞1点[145]（第11図12），ソウル特別市夢村土城第3号貯蔵穴の坏身1点[146]（第11図13），同南門址蓮池の広口壺1点[147]（第11図14），慶尚南道固城郡固城貝塚2次調査Ⅲ層の小型器台1点[148]などであり，最近全羅北道扶安郡竹幕洞の祭祀遺跡でも石製模造品と伴に無蓋高坏などが確認されている[149]。

出土例は小型品が多い。朝鮮半島各地の坏について見ると，新羅，伽耶の地域では坏につまみを付け，蓋に櫛歯文を描く例も多い。これに対して5世紀に百済の領域であった忠清南道では，三足の付く三足土器が見られ，つまみを持つもの[150]と持たないものがある。ところが，全羅道を中心とした地域では三足の付かない坏が主体で，また，つまみを付けない特徴を持ち，伽耶，新羅さらには百済とも違いが見られる。この中でも，忠清南道から全羅北道にかけてと，全羅南道との大きな違いは，前者の坏は三足土器の影響を受け，扁平で手持ち篦削り調整をしたものが主体（第11図17～22）である。それに対して全羅南道の坏は回転篦削り調整が主体であり，坏の蓋受け部や稜部などの作りは，わが国の須恵器と共通する特徴を持ち（第11図23～33），須恵器類似品と呼べるものである。しかし，底部や天井部の中央が平に削られるものが多いなど，いくつかの違いも認められる。

また，この全羅道には瑞や樽形瑞も分布しており，大きな特徴となっている。

先に須恵器と紹介した資料は，多くは百済，あるいは伽耶西部地域からの出土であり，須恵器




**第11図**　韓国出土の須恵器と須恵器類似品　(縮尺1/5)
1～6，忠北清州市新鳳洞B地区1号土壙墓　7，同A地区32号土壙墓　8，全南昇州郡大谷里ハンシルA－1号住居跡　9，同A地区表採　10，同C地区　11，慶南陜川郡鳳溪里20号墳　12，伝宜寧出土　13，ソウル特別市夢村土城第3号貯蔵穴　14，同南門址蓮池　15・16，全北井邑郡化龍里窯跡　17～20，忠南論山郡連山表井里3号墳　21・22，同5号墳　23，全南羅州郡新村里6号墳　24～29，同9号墳　30・31，全南羅州郡德山里4号墳　32・33，全南海南郡月松里造山古墳　34，出土地不詳　忠南大学校博物館蔵

類似品とどのように関わるのであろうか。

須恵器と紹介した資料は，大谷里ハンシル住居跡C地区出土の坏身が陶邑Ⅰ型式2段階並行まで遡る可能性があるものの，多くは陶邑Ⅰ型式3段階並行以降である。

先に系譜について触れたように，陶邑窯跡群では大庭寺窯跡と比較して，坏，瑯，樽形瑯が増加し，特にTK 216号窯では坏にはつまみが付かず，両耳付有蓋壺が見られる。半島の中で坏につまみが付く地域で後につまみが消失することはなく，わが国だけの変遷である。このような変遷は全羅南道との交流から起こり得た変化ではなかろうか。また，両耳付有蓋壺は全羅道から忠清南道にも見られることや，瑯，樽形瑯の分布とも関連していよう。このように陶邑Ⅰ型式1段階において坏につまみを持つ点で，この段階には全羅道を中心に慶尚南道西部を含めた地域の影響で陶邑が成立したものの，Ⅰ型式2段階ではさらに全羅南道との関わりが強くなったのであろう。

そのようなことは，半島の特に全羅道を中心とした地域に須恵器が見られることや，この地域の軟質土器の組み合わせや器形が，わが国における朝鮮半島からの渡来系土器と類似すること，全羅南道栄山江流域に見られる両袖型横穴式石室が九州系と考えられること，かつて羅州潘南面古墳群から「円筒埴輪」が出土していること，さらに韓国南部に分布する前方後円墳とも関連しており，両地域で何らかの交流があった結果であろう。

## おわりに

わが国に須恵器生産がいつ頃，どこから伝わってきたのか述べてきたが，初現期の須恵器生産は多元的に発生したようで，各地で系譜を異にした窯跡が見られ，今後も新たな発見も想定できよう。これらの窯がどのように伝えられたか，それぞれの窯跡の経緯について明確にすることは不可能であるが，当時の東アジアの動静の中におけるわが国の半島との交渉は，戦いも含めて密接であった。須恵器が伝播した前後の情勢を見ると，「広開土王碑文」の10年庚子条（400年）には，高句麗は歩騎5万で新羅の救援に向かい，百済，倭，加羅（伽耶）の連合軍と戦い，任那加羅まで南下して戦ったことが記される。その後何度かの倭の新羅への侵攻があったが，17年条（407年）の高句麗は，倭と考えられる相手から鎧を1万領押収するなどの勝利を納めている。この後しばらく倭との戦いの記事は少ない。しかし『三国史記』によると431年に倭兵が新羅を侵したこと，440年，444年，459年など同様の記事が記される。中でも440年には生口を略奪したこと，462年には倭人が活開城を襲い，一千余人を虜にして去ったことが記され[151]，このような形で工人を連行した可能性も考えられよう。あるいはこのような戦いを避けて，海を渡った[152]ことも想定できようが，おそらく新羅との戦いの頃，大庭寺窯跡をはじめ，初現期の伽耶系須恵器を生産した工人たちは，わが国に渡来したのであろう。

仮にわが国における須恵器生産の開始が4世紀に入るとするならば，大庭寺窯跡に見られる新

羅系要素から，4世紀代にすでに伽耶（大庭寺窯跡の伝わったと想定される釜山，金海，昌原，馬山にかけての沿岸地域）に新羅の影響が明確に及んでいたことになってしまう。「広開土王碑文」に見るように，新羅は倭などの侵攻に対して高句麗の救援を必要としていたように，当時伽耶まで勢力を南下するほど国力は高まっていなかったと考えられる。やはり伽耶まで領土拡張を図るのは，早くとも「広開土王碑文」に見る400年あるいは407年以降であろう。これは福泉洞31—32号墳に高句麗から移入されたと考えられる馬具や甲冑が大量に出土し，わずかながら新羅系土器が出土することと関連しよう。しかし，伽耶の土器に影響を与えるのはさらに後の福泉洞21—22号墳の段階である。すなわち大庭寺窯跡で須恵器生産を開始したのは420年から430年頃で，朝倉，三谷三郎池西岸，吹田32号窯の各窯跡も近い時期であろう。

また，倭と百済との関係は，対高句麗との関係からで，高句麗が都を平壌に移した427年以降，高句麗はますます百済へ南侵したようである。百済は倭に王族を人質として送り，高句麗を牽制したようで，このような関わりの中から，半島でも全羅道の地域とも交流を持ったのであろう。

特に陶邑において須恵器生産が伽耶系から百済系に移ったと考えるよりも，百済系の工人がより多く加わったために変容したのであろう。陶邑を中心とした地域でなぜこのような変容が起こり得たかについては，中央政権のもとに多くの須恵器工人が集められたため工人集団の再編成が行われ，いわゆる「須恵器の日本化」が完成したのであろう。そこで完成した須恵器が各地に伝わるのは，やはり中央政権を背景に，地方に工人の移動や技術伝播したのであろう。これが植野氏の言う一元論[153]であり，それ以前の各地で生産が開始された初現期須恵器の段階は，陶邑も含め各地域の首長層に掌握された多元的開始（多元論）であった。

須恵器の系譜については『日本書紀』の『垂仁紀』に，近江国鏡谷の工人は新羅王子天日矛の従人として新羅から，『雄略紀』の今来才伎の「新漢陶部高貴」は百済から来たとある。前述した伽耶系から百済系という，須恵器工人の系譜の流れを表しているものか，はたして説話的記録の中に5世紀が見えるのか疑問がある。しかし，今来才伎は百済系であるのは認めてよく[154]，今来才伎が来た時期すでに同様の技術が存在していたことまでは許されるであろう[155]。

大庭寺窯跡などいくつかの窯跡の報告書が刊行された後，再度系譜などの問題について検討してみたい。

最後になりましたが，本稿を草するにあたり下記の方々にご教示，ご指導をいただきました。記して謝意を表します。

岡戸哲紀，韓永熙，韓炳三，権相烈，佐原真，申敬澈，成洛俊，藤田憲司，兪炳夏，李健茂の諸先生および国立歴史民俗博物館共同研究（古墳時代における伽耶と日本の交流に関する基礎的研究）の白石太一郎先生を始め諸先生。

**註**

（1） 中村浩ほか『陶邑・深田』（大阪府文化財調査抄報第2集）大阪府教育委員会　1973

（2）　a．樋口吉文ほか『四ッ池遺跡』（堺市文化財調査概要報告第16冊）堺市教育委員会　1984
b．樋口吉文「近畿地域（3）―四ッ池遺跡の須恵器と陶質土器」『陶質土器の国際交流』柏書房　1989
（3）　三宮昌弘「初期須恵器製作集団と韓式系土器」『韓式系土器研究』Ⅱ　韓式土器研究会　1989
（4）　土井和幸・冨加見泰彦「大庭寺遺跡出土の初期須恵器および軟質土器」『韓式系土器研究』Ⅲ　韓式土器研究会　1991
（5）　岸本道昭・近藤康司「伏尾古墳群の性格」『陶邑・伏尾』A地区（財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第60輯）1990
（6）　岡戸哲紀「陶邑と大庭寺遺跡」『古墳時代における朝鮮系文物の伝播』（第34回埋蔵文化財集会）埋蔵文化財研究会・関西世話人会　1993　窯跡の正式な報告がされていないので，引用掲載できないため，本文献を参照いただきたい。
（7）　a．石神怡ほか『松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　財団法人大阪文化財センター　1984　P．794　b．樋口吉文「資料紹介　堺市周辺」『日本陶磁の源流』柏書房　1984
（8）　註（2）aのP．83
（9）　註（7）aのP．791
（10）　註（3）のP．1
（11）　註（2）aのP．228
（12）　註（4）のP．39
（13）　堅田直「畿内出土の漢式系土器について」『日本考古学協会第29回総会発表要旨』日本考古学協会　1953
（14）　堅田直「韓半島伝来の叩目文土器（韓式系土器）について」『日韓古代文化の流れ』帝塚山考古学研究所　1982
（15）　田中清美「あとがき」『韓式系土器研究』Ⅰ　韓式系土器研究会　1987
（16）　今津啓子「大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器」『岡崎敬先生退官記念論集　東アジアの考古と歴史』下　1987
（17）　植野浩三「韓式系土器の名称」『韓式系土器研究』Ⅰ　韓式系土器研究会　1987
（18）　田中清美「5世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』125　大阪歴史学会　1989
（19）　酒井清治「千葉市大森第2遺跡出土の百済土器」『古文化談叢』15　九州古文化研究会　1985
（20）　註(18)に同じ
（21）　報告書の図から算出したが，Ⅰ区で274個体中6点，Ⅱ区では213個体中13点であった。
（22）　三宮昌弘「小阪遺跡の古墳時代集落について―5世紀代泉北地域の集落の様相―」『考古学と技術』（同志社大学シリーズⅣ）1988
（23）　註（3）に同じ
（24）　藤田憲司・西村歩「最古の須恵器づくりの村」『須恵器の始まりをさぐる』（平成5年夏季企画展―第8回泉州の遺跡―）財団法人大阪府埋蔵文化財協会　1983
（25）　樋口吉文「四ッ池遺跡出土の須恵器」『陶邑』Ⅲ（大阪府文化財調査報告書第30輯）財団法人大阪文化財センター　1978
（26）　瓦質土器や三宮氏の指摘された硬質で轆轤を用いた製品は，窯で焼成された可能性は否定できない。
（27）　註(24)に同じ
（28）　a．藪内清ほか『立杭窯の研究―技術・生活・人間―』恒星社　1955　P．36　b．杉崎章ほか「民俗」『常滑窯業誌』1974　P．266
（29）　中村浩「陶邑窯跡群における工人集団と遺跡」『古文化談叢』20 九州古文化研究会　1988
（30）　註(29)に同じ
（31）　註（6）に同じ
（32）　註（7）aのP．796
（33）　中村浩ほか『陶邑』Ⅲ（大阪府文化財調査報告書第30輯）大阪府教育委員会　1987
（34）　大阪府教育委員会『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』1966　堀江門也・中村浩「一須賀古窯跡出土遺物について」『陶邑』Ⅲ（大阪府文化財調査報告書第30輯）大阪府教育委員会　1987
（35）　辻川陽一ほか「阪南古窯址群出土の須恵器」『古代学研究』70　古代学研究会　1973　筆者は濁り池窯跡の資料を，辻川陽一氏らのご好意で実見させていただいたが，前稿（「須恵器の生産技術はい

つ伝来したか」『新視点日本の歴史』 2古代編1993）で実見したままを記述してしまった。しかし，実見した資料は全てでなく，記述内容についても整理者に確認せず記述しているため誤りもあるとの指摘をいただいた。ここに整理者にご迷惑をかけたことをお詫びするとともに，いつか再度検討する機会を持ちたい。

(36) 藤原学「吹田32号須恵器窯跡」『昭和60年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』吹田市教育委員会 1986
(37) 財団法人大阪埋蔵文化財協会『須恵器の始まりをさぐる』 1993 大庭寺窯跡については正式に公表された資料だけを使用した。註(6)文献に図が掲載されているが，整理中であり使用しなかった。参照いただきたい。
(38) 香川県教育委員会「三谷三郎池西岸窯跡」『香川県埋蔵文化財年報―昭和58年度―』 1984
(39) 九州大学考古学研究室「山隈窯跡群の調査」『九州考古学』65 九州考古学会 1990
(40) 田辺昭三「初期須恵器について」『考古学論考』（小林行男博士古稀記念論文集）平凡社 1982
(41) 中村浩「近畿地域の須恵器と陶質土器」『陶質土器の国際交流』柏書房 1989
(42) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981 P. 132
(43) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 P. 37
(44) 註(4)(6)(24)に同じ
(45) 川原和人「島根県発見の朝鮮系陶質土器」『古文化談叢』5 九州古文化研究会 1987
(46) 中村浩ほか「叩き目文について」『陶邑』Ⅱ（大阪府文化財調査報告書第29輯）財団法人大阪文化財センター 1978 P. 234
(47) 中村浩ほか「叩き目文について」『陶邑』Ⅰ（大阪府文化財調査報告書第28輯）財団法人大阪文化財センター 1976 P. 257～263
(48) 註(16)の比率を%に換算した。
(49) 尾谷雅彦「久宝寺遺跡出土韓式土器について」『久宝寺北（その1～3）』（近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）財団法人大阪文化財センター 1987 P. 332の出土点数を%に換算した。
(50) 註(18)に同じ
(51) 註(16)文献で今津啓子氏は，大阪湾沿岸の半島系土器を出土する遺跡を，地理的な立地条件をもとにⅠ～Ⅻのグループに分け，Ⅷの陶邑周辺グループの須恵器生産との関わりについて指摘された。
(52) 藤原学「近畿地域(5)―吹田32号須恵器窯跡の遺物―」註(41)の P. 190
(53) 註(41)の P. 93
(54) 亀田修一「中国・四国地域」註(41)文献の P. 140
(55) 橋口達也ほか『池の上墳墓群』（甘木市文化財調査報告第5集）甘木市教育委員会 1979 P. 132
(56) 橋口達也ほか『古寺墳墓群』Ⅱ（甘木市文化財調査報告第15集）甘木市教育委員会 1983 P. 98
(57) 柳田康雄「池の上墳墓群と陶質土器」『甘木市史』上巻 1972
(58) 小田富士雄「九州地方」『日本陶磁の源流』柏書房 1984
(59) 小田富士雄「須恵器文化の形成と日韓交渉・総説編―西日本初期須恵器の成立をめぐって―」『古文化談叢』24 九州古文化研究会 1991
(60) 中村勝「筑紫における須恵器編年（予察）」『九州考古学』63 九州考古学会 1989
(61) 川述昭人「付編 石人山古墳出土遺物」『瑞王寺古墳』（筑後市文化財調査報告第3集）筑後市教育委員会 1984
(62) 下村智・横山邦継「福岡県樋渡遺跡」『日本考古学年報』36（1983年度版） 日本考古学協会 1986
(63) 山崎純男「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式須恵器」『古文化談叢』6 九州古文化研究会 1979
(64) 柳田康雄ほか『小田茶臼塚古墳』（甘木市文化財調査報告書第4集）甘木市教育委員会 1979
(65) 濱石哲也ほか『吉武遺跡群』Ⅳ（福岡県埋蔵文化財調査報告書第194集）福岡市教育委員会 1989
(66) 中村勝・横山邦継「福岡市金武小学校蔵の須恵器」『古文化談叢』18 九州古文化研究会 1987
(67) 横山邦継・下村智・三辻利一・杉直樹「福岡市・飯盛遺跡出土陶質土器の産地推定」『古文化談叢』18 九州古文化研究会 1987
(68) 柳田康雄ほか『国道200号線関係埋蔵文化財概報』（福岡県文化財調査報告書第67集）福岡県教育委員会 1984
(69) 蒲原宏行・多々良友博・藤井伸幸「佐賀平野の初期須恵器・陶質土器」『古文化談叢』15 九州古

文化研究会　1985
(70)　註(64)のP. 62
(71)　註(64)のP. 13
(72)　註(59)のP. 64
(73)　註(62)に同じ
(74)　註(69)に同じ
(75)　註(57)に同じ
(76)　註(60)のP.26
(77)　田辺昭三「陶質土器の系譜」『日本美術工芸』389　1971
(78)　中村浩「須恵器の初源―その様相と生産の系譜―」『MUSEUM』451　ミュージアム出版　1988
(79)　申敬澈「五世紀代における嶺南の情勢と韓日交渉―嶺南の陶質土器と甲冑を中心として―」『公開シンポジウム　東アジアの再発見』読売新聞社・アジア学会　1990
(80)　武末純一「須恵器のはじまり」『五世紀の北九州』(北九州市立考古博物館第7回特別展図録)　1989
(81)　西谷正「九州北部の初期須恵器とその系譜」『異国と九州』雄山閣　1992
(82)　註(24)文献
(83)　灰掛薫『府中遺跡群発掘調査概要』Ⅳ　和泉市教育委員会　1984
(84)　郭鍾喆「韓国慶尚道地域出土の陶質大形甕の成形をめぐって―底部丸底化工程を中心として―」『東アジアの考古と歴史』　1987
(85)　釜山大学校博物館『東莱福泉洞古墳群』Ⅰ（釜山大学校博物館遺跡調査報告第5輯）　1983
(86)　釜山直轄市立博物館『東莱福泉洞53号墳』(釜山直轄市立博物館遺跡調査報告書第6冊)　1992
(87)　慶尚大学校博物館『陜川玉田古墳群』Ⅲ（M1・M2号墳）　1992
(88)　慶尚大学校博物館『陜川玉田古墳群』Ⅱ(M3号墳)　1990
(89)　申敬澈「大成洞古墳の概要」『東アジアの古代文化』68（伽耶と倭国）大和書房　1991
(90)　趙榮濟（高正龍訳）「三角透窓高坏に対する一考察」『韓式系土器研究』Ⅲ　韓式系土器研究会　1991
(91)　昌原大学博物館『馬山縣洞遺跡』(昌原大学博物館学術調査報告書第3冊)　1990
(92)　嶺南大学校博物館『陜川苧浦古墳A発掘調査報告』(学術調査報告第8冊)　1987
(93)　釜山大学校博物館「東莱福泉洞古墳群第3次調査概報」『嶺南考古学』7　嶺南考古学会　1990
(94)　昌原大学博物館『昌原道溪洞古墳群』Ⅰ（昌原大学博物館学術調査報告第1冊）　1987
(95)　李相憲「釜山槐亭洞古墳群출토의　토기자료」『伽耶通信』17　1988
(96)　申敬澈氏にご教示いただいた。
(97)　釜山大学校『咸陽白川里1号墳』(釜山大学校博物館遺跡調査報告第10輯)　1986
(98)　国立慶州博物館『菊隠李養璿蒐集文化財』　1987　P. 203
(99)　国立慶州博物館・慶北大学校博物館・慶州市『慶州市月城路古墳群』　1990　P. 304
(100)　釜山大学校博物館『東莱福泉洞古墳群第2次調査概報』　1989
(101)　釜山大学校博物館『東莱福泉洞古墳群』Ⅱ（釜山大学校博物館遺跡調査報告第14輯）　1990
(102)　釜山大学校博物館『釜山華明洞古墳群』(釜山大学校博物館遺跡調査報告第2輯)　1979
(103)　関川尚功「奈良県下の初期須恵器」『考古学論考』10　奈良県橿原考古学研究所　1984
(104)　門田誠一「文様からみた初期須恵器工人の一原郷―生産関連遺跡発見資料の対照から―」『考古学と生活文化』(同志社大学考古学シリーズⅤ)　1992
(105)　北野耕平『河内野中古墳の研究』　臨川書店　1976
(106)　斉藤明彦「四条大田中遺跡」『韓式系土器研究』Ⅲ　韓式系土器研究会　1991
(107)　全羅北道や忠清南道との関わりがないのは，わが国に三足土器がないこと，この地域の坏は手持ち篦削りであるが，わが国の須恵器は回転篦削りである違いからである。
(108)　釜山大学校博物館『金海禮安里古墳群』Ⅰ（釜山大学校博物館遺跡調査報告第8輯）　1985
(109)　国立晋州博物館『国立晋州博物館展示図録』　1984
(110)　東亞大学校博物館『陜川鳳溪里古墳群』(古蹟調査報告書第13冊)　1986
(111)　慶尚大学校博物館『河東古梨里遺蹟』(慶尚大学校博物館調査報告書第5輯)　1990
(112)　註(81)のP. 14
(113)　註(80)のP. 49

(114) 森浩一「須恵器初期の様相と上限の問題　特に大阪南部窯址群を通じて」『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』 1961
(115) 註(43)の P. 47
(116) 白石太一郎「近畿における古墳の年代」『考古学ジャーナル』164　1979
(117) 都出比呂志「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』67―4　日本考古学会　1982
(118) 註(55)(56)に同じ
(119) 註(51)に同じ
(120) 註(60)に同じ
(121) 註(74)に同じ
(122) 註(39)に同じ
(123) 註(59)の P. 59
(124) 申敬澈 a.「伽耶地域の陶質土器」『陶質土器の国際交流』柏書房　1989　P. 73　b.「金海禮安里160号墳에對하여」『伽耶考古学論叢』1　1992
(125) 註(100)に同じ
(126) 宋桂鉉・安在晧「古式陶質土器に関する若干の考察（下)」『古代文化』40―9　古代学協会　1988
(127) 註(126)の P. 39
(128) 国立晋州博物館権相烈氏にご教示いただいた。
(129) 註(29)の P. 33
(130) 朴天秀氏は大庭寺窯跡を3段階に分け，40～50年の年代幅を想定されたが，窯の操業年代としては長すぎると考えられる。朴天秀「韓半島から見た初期須恵器の系譜と編年」註(6)と同一文献。
(131) 近藤利由・虎間英喜『久米田古墳群発掘調査概要』Ⅰ　岸和田市教育委員会　1993
(132) 虎間英喜「久米田古墳群出土の初期須恵器」『韓式系土器研究』Ⅳ　韓式系土器研究　1993
(133) 東京国立博物館ほか『伽耶文化展』 1992　図版219
(134) 註(103)の P. 47
(135) 阪田俊幸「橿原市南山古墳群第4号墳」『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』 第21回埋蔵文化財研究会　1987
(136) 薗田香融ほか『和歌山市における古墳文化』関西大学文学部考古学研究室　1972
(137) 亀田修一「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』30（中）九州古文化研究会　1993
(138) 酒井清治「韓国出土の須恵器類似品」註(137)と同一文献
(139) 忠北大学校博物館『清州新鳳洞百済古墳群発掘調査報告書―1990年度調査―』 1990
(140) 李命憙「大谷里한실住居址」『住岩댐水没地域文化遺蹟発掘調査報告書』Ⅶ　全南大学校博物館・全羅南道　1990
(141) 註(110)の P. 81
(142) 百済文化開発研究院『百済土器図録―百済遺物図録第2輯―』
(143) 国立光州博物館『한국의　옹관묘（特別展韓国の甕棺墓)』 1992
(144) 註(142)に同じ
(145) 技法，文様とも須恵器に酷似しているが，やや頸部が太い点が問題である。
(146) 夢村土城発掘調査団『夢村土城発掘調査報告書』1985　実見していないが，図からは平底であることから，全羅道との関連があろうか。
(147) ソウル大学校博物館『夢村土城西南地区発掘調査報告』1989　資料の実見と実測に際しては，佐原真，韓炳三，李健茂の各先生にはご便宜をはかっていただいた。実見したところ，口縁部の波状文，形態などは須恵器に酷似するものの，硬質で器肉が光沢を持つ灰色で，表面に淡緑色の自然釉がかかり，胴部の格子叩きとその上に施されたカキ目は，須恵器とするには違和感がある。
(148) 国立中央博物館『固城貝塚』 1992　図25―⑱　資料の実見と実測に際しては，佐原真，韓炳三，李健茂の各先生にはご便宜をはかっていただいた。実測したところ，口径21.2cmの鉢形となり，沈線で区画された間には波状文が巡り，体部下半には格子叩き，内面には青海波文が見られる。格子叩きは夢村土城の壺と類似している。
(149) 韓永熙・李揆山・兪炳夏「扶安竹幕洞祭祀遺蹟発掘調査進展報告」『考古学誌』 第4輯　韓国考古美術研究所　1992　資料の実見に際しては韓永熙館長，兪炳夏氏にご便宜をはかっていただいた。実見したところ無蓋高坏は坏部が浅いものの，須恵器の可能性は高い。他にも須恵器との関連資料は多

いが整理途中であり，公表されてから検討したい。

(150)　つまみには環状と中実のつまみがあるが，環状のほうが多いようである。

(151)　武田幸男『高句麗史と東アジア』岩波書店　1989　金廷鶴『任那と日本』（日本の歴史　別巻1）小学館　1977

(152)　同様の考え方は西谷正氏が提示されている。註(81) P. 15

(153)　植野浩三「初期須恵器の系譜について―大蓮寺窯跡を中心にして―」『文化財学報』 9　奈良大学文学部文化財学科　1991　「日本における初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学紀要』21　1993

(154)　平野邦男『大化前代社会組織の研究』吉川弘文館　1971

(155)　小林行雄（『古代の技術』塙書房 1962）氏は，『日本書紀』の記事から「新羅系と百済系との，二種の流派が並行して伝来したことを意味するか否かは，かるがるしくは断じえない」としている。岩崎直也（「地方窯の上限と系譜を求めて(Ⅱ)―近江を中心に―」『滋賀考古学論叢』 3　1986）氏は，初期須恵器のうち胎土，焼成の特徴からA～C類に区分した内，A類土器群は近江で生産された可能性を述べ，その時期が陶邑Ⅰ型式1段階並行まで遡るとした。近江での初現期須恵器の生産が事実ならば，説話的記録と符合する可能性があろうか。

脱稿後，『小坂遺跡』『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』の刊行を始め，1993年11月27・28日，吹田市立博物館における「討論会　須恵器の始まりを考える」など，本稿と関連する事項が検討されているが，改めて検討する機会を持ちたい。なお，吹田市立博物館で報告された，神戸市出合窯跡は，登窯で焼成された瓦質土器が出土しており，4世紀に遡る可能性も指摘され，今後，朝鮮半島との土器の交流史を検討する上で，注目される資料となろう。（「須恵器生産のはじまり」『歴博』63号　1994）

（国立歴史民俗博物館資料課）

# On the Start of Production of *Sueki* Ware in Japan

SAKAI Kiyoji

When and where was *Sueki* ware first transmitted into Japan? Investigations of the remains of kilns, including those of the *Suemura* (陶邑) group, have provided a lot of information for the study of *Sueki* ware, but no consideration has been given to where the people who produced it lived, or what kind of lives they led. Investigations in recent years have been extended to the sites of settlements in the environs of *Suemura*, and these have come to be discussed as the settlements of craftsmen. However, this discussion did not develop very far, as the settlements were not definitely identified as being the settlements of craftsmen.

The present paper traces the stage that has been reached in research into the craftmen's settlements, and ascertains that the sites that are called craftmen's settlements were connected in a variety of ways with the production of *Sueki* ware, and that a variety of studies still need to be carried out linking the kilns with the settlements and the workshops.

At the stage when *Sueki* ware first appears in Japan, production of it had already begun in various parts of the country, and the peculiar features of each area show clearly the different genealogies: the *Ōbadera* kiln coming from Eastern Kyongsang-Namdo, the *Asakura* group of kilns from Western Kyongsang-Namdo, and the *Suemura* group of kilns from Western Kyongsang-Namdo to Cholla-Namdo. We may say that these craftsmen crossed over to Japan as part of the interchange including fighting, on the Korean peninsular, and that the production of *Sueki* ware had a pluralistic start under the various local chiefs. However in *Suemura*, which was close to the central government, as soon as production started craftsmen were brought over to Japan from the area centered on Cholla-Namdo; Japanese *Sueki* ware was perfected, and both the finished goods and the technique were apparently transmitted throughout the country by the central government. Contacts between Japan and Cholla-Namdo may also be gathered from *Sueki* ware excavated on the Korean peninsular, and from imitation *Sueki* ware bearing a close resemblance to the *Sueki* ware made on the Korean peninsular.

As for the period when *Sueki* ware first began to be made, judging from the Shiragi-type elements that can be seen in products from the *Ōbadera* kiln this would be around the time when Shiragi invaded the Pusan area on the Korean peninsular and the earthenware of that area began to be influenced by Shiragi: perhaps from the 420's to around 430.